

論文

スポーツによる社会課題への 取り組みと教育プログラムへの応用 —第2回奥能登被災地復興支援活動 の事例報告—

宮崎 純一

キーワード

社会課題
スポーツ
アクティブラーニング

目次

- はじめに
 - スポーツによる社会課題への取り組み
 - 大学生（アスリート、マネジメントスタッフ）による復興支援活動の実践
 - 活動に向けたマネジメントチーム作り
 - スポーツによる復興支援活動と
 - 被災地視察と仮設住宅訪問、交流会
 - 支援活動とサーバントリーダーシップ
 - まとめ
- 参考文献

1 はじめに

本研究はスポーツによる社会課題への取り組みを教材として、実践教育プログラムを開発することを目的とした事例研究である。「オール青山スポーツコミュニティ・プロジェクト^{*1)}」(以下オール青山 SC)は、学院内においてスポーツを通して地域と大学を繋ぐ活動を開始して4年目を迎える。昨年に引き続き、そのスキームを用いて学外における活動を展開している。2026年3月には、昨年に引き続き2回目となる能登半島沖地震被災地支援を目的とした「スポーツによる復興支援活動」を実施した。これに向け大学生アスリート、マネジメント担当学生に加え、学院内教職員により総勢30名に及ぶプロジェクトチームが構成された。2026年3月16日～18日の3日間で輪島市、能登町、珠洲市の中学校4会場にてスポーツチャレンジを実施し、能登町、珠洲市の仮設住宅集会場等にて高齢者を中心とした交流会を主催した。

これらの活動に携わった学生たちの成果を行動観察、インタビューおよび約200名の現地参加者からのアンケート回答などから評価、検討を加え、課題を見出していく。今回は3年間にわたり学内で培ってきた「スポーツによる社会課題への取り組み」のスキームを被災地復興支援という形で学外に提供する機会となった。これまで年間に夏冬2回ずつ青山キャンパスと相模原キャンパスにて開催した「キッズスポーツチャレンジ」を現地にて実施した。これは小学生を対象として保護者も参加可能なマルチスポーツ体験として多くの参加者を集める人気イベントである。先行研究²⁾から、社会課題解決への取り組みはスポーツ活動との親和性が高いことが指摘されている。そこで、このような取り組みを対象として教育活動に応用することを目的としたアクティブラーニング講座「スポーツマネジメントキャリア演習」を開講した。初年度の成果は既報³⁾の通り、スポーツ関連の専門学部を有しない本学において学部での「学びの成果」を活用した地域社会連携スポーツ事業へ関心の高さと、積極的な関りが示された。現場における指導、運営、企画から資金調達に至るまで各学部での学びを有用に発揮するステージとしてスポーツ事業の現場は教育的効果を発揮したことが報告されている。



資料1 参加者スタッフ全体集合写真

3日間の取り組みから、学生たちは現地の参加者の中学生から高齢者の皆さんとの交流、協働するスタッフ間でのやり取りからも多くの学びがあった。さらに、帰京し日常の生活に戻ってからも、以下のように訪問先の中学校よりさらに交流を発展させたいとの要望があった。

「先日は、学生によるスポーツ体験教室に参加させていただき、ありがとうございました。生徒たちは、普段なかなか体験することがないスポーツに触れることができ、大変うれしそうな様子でした。その中で、生徒から『もっと交流したい』、『次はいつ会えるのか』、『できるなら自分たちも大学を訪問したい』という声が多く聞かれました。そのような生徒の声に何とか応えることができないかという思いから、ご連絡させていただきました。可能であれば修学旅行で東京を訪れた際に、大学を訪問し、学内見学や大学生との交流学习ができないかと考えております。」

参加学生たちと、この要望を共有した直後に、2年連続でこの取り組みに運営スタッフとして関わり、3年間にわたり学内企画、運営、指導を担ってきた学生から下記のようなリアクションがあった。

「個人的にはすごく嬉しい。こういうことが一番大事なんじゃないかと思っています。正直、自分は中学1年から青学を目指していたので、大学生みたいな枠組みに漠然と憧れがありました。ただ地方にいればそういった大学生と交流する場面はないです。だから実際に『大学ってどういうところなんだろう?』という想いだけが先走りしていたような感じがあったと思います。とくに地方だと大学が身近にないため大学に行きたいと思うきっかけがない子が多かったり、親の収入で大学でもいく場所が限定されたりする子、親が大学に行っていないので大学は必要がないと思っている家庭があったり。周りの子たちもそうでした。本当に家庭とか周りの環境に依存して生きていると思います。奥能登の生徒さんたちも僕の出身の小学校、中学校と同じような規模感だったので、どこか懐かしさみたいなものも感じました。もし、大学で行われる何かに携われるなら参加したいと思っていますし、地方の大学の進学率とかってすごく問題だと思っているので関わらせてください。」

また、1年次にスポーツマネジメントキャリア演習を履修し学内各行事に携わり、その後奥能登復興支援のボッチャ大会にボランティアサポートで参加した学生スタッフからも早々に積極的なリアクションがあった。

「今回の取り組みは、生徒にとって非常に良い経験になると感じており、ぜひ実施しても良いのではないかと考えています。私自身、高校の修学旅行で青山学院大学を訪れたことが大学選びの契機となり、大きく視野が広がった経験があります。特に地方出身の生徒にとっては、新しい環境に触れる貴重な機会になるのではないかなと私は考えます。また一案ではありますが、もし可能であれば留学生との交流の機会を設けることで、さらに視野の広がる機会となり、中学生のみんなにとってより有意義な経験になるのではないかと思います。ま

た、修学旅行は生徒にとって楽しい行事でもあるため、学習的な要素が増えることで楽しさが損なわれてしまう可能性もあるかもしれません。そのため、生徒の意見も大切にしながら検討して頂ければと思います。参加できそうで、あれば是非お手伝いさせて下さい。」

加えて、昨年度のスポーツマネジメント講座を履修したことが、今回の奥能登復興支援活動への参加に繋がった学生スタッフからは、さらに具体的な提案も寄せられた。

「素敵な交流だと思います。まだ依頼できるかなどの確認は取れていませんが、私の所属しているキャンパスツアーガイド団体でしたら、キャンパス案内できると思います。平日なのでガイドが確保できるか、スポーツ施設などは案内内容に含まれていないことについては要相談かもしれません。この方向性でよろしければ、打診など可能です。ご検討よろしくお願いします」

スタッフとして活動に携わった学生たちの資質、経験に加え、今回の奥能登支援活動に参加したこと、そこでチームとして活動できたことは多くの「学び」と更なる「意欲的な取り組み」への契機をもたらしたと示唆される。

2 スポーツによる社会課題への取り組み

本学において大学資源を活用し、社会課題に取り組むスポーツ活動を学部教育への応用を促し、社会活動としてのスポーツを多角的にサポートする学生に有用な経験をもたらした。事業内での指導、運営、企画に各学部での学びを有用に発揮するプラットフォームと位置付けられ、そこでフィードバックされた省察に基づいたグループ討議を経て、実践に向かう循環学習が積み重ねられる。幅広い年齢層において心身の健康を獲得するための施策は少子高齢化社会に備えるための重要な社会課題といえる。

2010年文部科学省の示した「スポーツ立国戦略」とこれに続く翌年の「スポーツ基本法」の制定により、欧州に倣い国家的プロジェクトとしてスポーツに取り組む施策が開始された。新たに制定されたスポーツ基本法には、全ての人にスポーツの楽しみを享受する権利が保証され、競技スポーツにおいては国際大会招致に際する行政支援などが明記され、スポーツ活動の推進は長期的な国家行政課題として認識されることとなった。スポーツを通して健康の維持増進、体力増強に加えてスポーツコミュニティによる社会的なつながりを形成することにより心身の健全な維持発達を促すこととなる。核家族化、IT主導社会がもたらす多くの社会課題に対して、これらを解決する有効な施策として期待が寄せられた。「する」、「みる」、「支える」スポーツを通じて新たな視点からコミュニティが醸成されることへの期待がよせられる。本学においても、この指針を受けて学院内のスポーツ施設およびスポーツ関連人材を大学資源ととらえ、地域創生に還元する活動を既報^{12),13)}の通り実践してきた。

また、スポーツによる地域貢献は、人々の主体的かつ自主的な実践が肝要であり、これら

の行為はソーシャル・キャピタルを生み出し、スポーツコミュニティへの参加者がその担い手となることを期待している。近年では、2015年に採択された「2030年を目標年次とする持続可能な開発目標（SDGs）」において、“Good health and well-being”が目標の一つとして設定された。健康の獲得とウェルビーイング促進は、両翼として持続可能な目標として期待される。ウェルビーイング・コミュニティを創生するためにスポーツが担う役割や有用性に関連した報告^{16),17)}が散見される。これに倣いコミュニティを基盤とした日常において、対面で交流することの有用性や価値を見出し、ウェルビーイング・コミュニティ創生に向け本学においても社会連携機構を中心とした多くのスポーツ活動¹⁵⁾が発足した。

2022年8月には、スポーツ庁より一般社団法人大学スポーツ協会（UNIVAS）に事業委託され「大学スポーツ資源を活用した地域振興モデル創出事業」とより具体的かつ明確な達成目標を掲げた事業となった。青山学院大学は前回、第2期スポーツ基本計画で唱えられた「スポーツ環境の基盤となる『人材』と『場』の充実」を支える施策として取り上げられた「大学スポーツの振興」に引き続き、事業計画が採択された。学院内ボトムアッププロジェクトであるオール青山SCはそこでCAS事業（社会に必要とされる指導人財育成：現在は社会連携機構内の事業として継続）を形成する両輪のいっぽうである指導者養成事業の中心的な活動を担って約1年半に渡り企画運営を担った。2025年度からは大学方針による縮小化を受け社会連携機構と事務部署が担う事業にシフト変更された。

2024年度は移行期として前掲のスポーツ活動は、教育研究機関である大学として研究プロジェクトと授業プログラムとしてアクティブラーニングのトライアルが実施された。他大学の地域連携スポーツ事業では体育大学あるいは体育学部を有する大学が学生たちの実践的学びの場として積極的な関りが多くみられる。本学の学生スポーツ活動を肯定的に捉え、地域連携スポーツ事業への特徴的かつ積極的な関り方を考慮する余地が多い現状である。「様々な学部での学び」は即ち、スポーツ活動を多角的にサポートする立場にある学生たちの学びに通じる可能性を有している。研究プロジェクトにおいては「アントレプレナーシップ開発」を目的として、この大学総合型スポーツクラブを対象とした学生活動から成果を見出そうとしている。スポーツマネジメント・キャリアプログラムでは、学部での学びを実践に応用する機会が提供される。この積み重ねは事業の「視察」から、「指導・運営」など実践的な関りに繋がり、さらに「企画・提案」へと発展的な関りが求められる。これらの過程には事業の目的達成に向けた、多角的な視点や準備が求められ「チーム」でプロジェクトを動かし、それぞれの役割の中で互いに事業達成のためのリーダーシップ発揮が必須となる。

オール青山SCの3年半に及ぶ活動は、参加者に対するプログラムの提供と共に指導者および運営スタッフの養成研修プログラムとして役割を果たしてきた。対象となるプロジェクトの学生リーダーに加え、実習として参加する経営学部スポーツマネジメントゼミナールお

よびスポーツマネジメントキャリア演習の履修生からは、既存事業への改善や新規事業に関する多くの提案がなされている。これは継続的に事業に関わってきた学生リーダーやアクティブラーニングとして関わる履修生が各学部での学びを活かし、現場での経験に基づき導き出した成果として大いに評価される。このプロジェクトは大学内の施設を使用し、短期的なサイクルでトライアル実践が可能なことから、その成果は速やかに可視化され実践者にフィードバックされる。このような特徴を有することは、数多くの事業を企画立案から速やかな実践に繋げる要因となっている。

2025 年は学内の活動に留まらず「国内外の社会課題」に対してスポーツで取り組む実践を創出してきた。下記に示したプロジェクト企画は、いずれも「スポーツで社会課題に取り組む」というプロジェクトの主たる活動目的に沿って、スポーツのチカラを「社会課題解決コミュニティ創生」に活かす取り組みとして有用である。奥能登被災地の3市町村にて実施した、小中学生対象のスポーツ体験プログラムは、子供たちに加え保護者や高齢者の参加もあり、スポーツを通じた共生コミュニティ創生に示唆を与えた⁷⁾。同様に能登町を中心に現地の民間ボランティア団体と民間企業ボランティア部が開催したボッチャ大会⁹⁾でも主な対象となった高齢者と共にパラアスリート、児童クラブの少年たちが参加し、運営には地元中高生や大学生が加わることにより幅広く、多様な交流が生まれた。南三陸の技能実習生対象のウォーキングフットボール大会¹⁰⁾は結果的に地元主催者のみの参加となりながらも過疎地域における幅広い年齢層の住民同士の交流に、海外からの技能実習生を招き入れる契機となる取り組みの足掛かりとなった。このように「スポーツによる社会課題への取り組み」は、アントレプレナーシップ教育の実践的教材として企画、運営に関わる学生たちに学びを与える有用な機会となる。さらに、これらの活動を継続的な取り組みとして、有用な人材育成に繋がることが期待される。

3 大学生（アスリート、マネジメントスタッフ）による復興支援活動の実践

3-1 活動に向けたマネジメントチーム作り

2025 年 12 月から翌年 2 月の間に、筆者と角田氏により昨年に引き続き 2 回目となる支援活動の打ち合わせを実施した。2025 年度には石川県能登町にて「奥能登被災地支援・東日本震災地からの元気を届ける！少年少女マーチングバンド公演（運営サポート、7月）」、「奥能登高齢者ボッチャ大会（民間団体主催活動の運営サポート、10月）」および宮城県南三陸町にて「南三陸技能実習生対象ウォーキングフットボール大会（現地団体主催活動の運営サポート、10月）」などの活動を角田氏と共に本学の学生スタッフが同行している。これにより、現地での情報収集は昨年度に比較して改善が図られ、支援活動実施に向けた準備は迅速となった。現地自治体、市民ボランティア団体との交渉は角田氏が精力的に実働したことによ

り着実に進行した。これには昨年度の復興支援活動が評価され、再訪を望む声が多く上がったことも見逃せない理由のひとつであり、前回関わってくれたアスリートやスタッフの皆さんには再度熱い感謝の念を抱く契機となった。その結果、2月末には活動概要が明らかとなり学生アスリート、マネジメントチームの構成、活動も速やかに進められた。今年度は、3日間で石川県輪島市、珠洲市、能登町の3地域にて4校の中学校を訪問しスポーツチャレンジを実施する。これにより対象は小学生から中学生へと年齢層が変更となった。また、授業時間に学校を訪問することから希望者が参加するスポーツイベントから、参加意志にかかわらず全員が参加する授業となり、参加形態の変更も加味された。各会場においては中学校で給食と一緒に体験する企画や、高校の部活動指導などがプログラムに加えられた。更に、このようなスポーツ活動の他に「被災地を知る」支援として、高齢者が多く暮らす仮設住宅集会所での交流会が3会場で企画された。宿泊所として利用することとなった施設は廃校となった小学校を利用して開設された、地元家族経営の宿舎であった。昨年の活動同様に食材を持参し自炊により食事をすることとなった。こちらでも、角田氏の交渉によりJリーグツェーゲン金沢のサポーターで能登にて米作りをされているご夫婦の厚意で食材の準備、調理指導を頂いて学生たちの自炊をサポートして頂くこととなった。

現地に向かう前に角田氏の声掛けで、マネジメントスタッフミーティングに加え学生アスリートを含めた全体ミーティングを週に1回のペースで数回開催した。冒頭に被災地の現状把握と活動趣旨の共有、確認事項としてスタッフの役割分担、スケジュールの確認、持ち込み物品の確認、会場施設や器具の確認、参加者への記念品の作成分担など多岐に渡る内容を確認することから始まった。昨年の経験を踏まえて角田氏は提案とファシリテートを常として、決定、判断を要する事案は極力、学生の意思を尊重する姿勢を徹底した。毎回、事前、事後にはもっと詳細なプランを綿密に確認したい、するべきであったという省察が議場に上がるが「現状を目の前にして、その課題に即した対応を全力で実践する」という被災地における臨機応変な決定、遂行が最も優先されることであるという常は変わりなかった。

2023年5月、2024年1月の地震被害、同年夏の豪雨災害と容赦ない自然災害が奥能登地域を襲った。前回2025年3月の第1回支援活動前には、角田氏主催による被災地中学生のバリ五輪招待に参加した5名の中学生のうち3名と面会し、各地域を案内しながら現状を聴取する機会を得た。今回の活動では、そのうち2名が所属する中学校にてスポーツチャレンジを実施することが出来た。仲間たちと同じ時間を過ごす彼らは大きく成長を遂げ、心に深い傷を負った経験を背負いながらも力強く前進している姿勢は心強かった。

また、輪島市の少年サッカークラブのスタッフの皆さんにも昨年同様、被災地視察の際には詳細な案内と説明を頂き、多くの学生たちが目の当たりにした現状に加え、復興の様子を再確認する作業となった。

市外への移住者が増加する珠洲市に住む宝立地域の中学生との再会は叶わなかった。小学校と中学校で合わせ数名というスポーツチャレンジへの参加状況からも若年層の減少は地域課題として実感することとなった。

徳島出身で能登町を中心に復興支援をコーディネートする市民ボランティア団体リーダーの青年「りきくん」は、今年も活動をサポートしてくれた。サッカー選手であることからチャレンジ種目も積極的に関わり、中学生のみならず大学生スタッフも巻き込みながら大いに会場を盛り上げてくれた。彼の支援活動に本学の学生2名もボランティアスタッフとして参加するとのことで、早めの能登入りにより1泊2日をスポーツチャレンジに充てて協力してくれた。

3-2 スポーツによる復興支援活動と

出発前々日の2026年3月14日(土)には、大学からの借用物品を大型スーツケース2つに詰めて、マネジメントスタッフが自宅へ持ち帰っていった。その後の情報共有により、早朝の空港への搬送が一人では困難であるとの問題が提起された。直後に、今年から参加の女子スタッフから「サポート可能である」旨の連絡があり、速やかに課題解決となった。スタッフ間の連携も向上した兆しが垣間見られる出来事となった。

3月15日(日)	※角田氏自家用車にて事前準備
3月16日(月)	
8:00	羽田空港ロビー集合
8:55	羽田空港ANA747→
9:55	のと里山空港
	※移動：マイクロバス20名(現地支援団体定員20名)、荷物車2名
11:00	昼食
12:00	輪島朝市跡 被災地視察
13:00	会場到着
13:30~15:20	輪島中学校(参加者80名)
移動	キッズチャレンジin 輪島 輪島市 輪島中学校
16:30	宿泊先「春蘭の里 片付けボランティア」(汚れても良い服装、軍手)
17:30	風呂タイム(移動→柳田温泉大浴場)
19:00	夕食作り・ミーティング

資料2 日程：3月15日、16日

いよいよ3月16日(月)早朝に羽田空港から、のと里山空港に向かう学生マネジメントスタッフ7名(後発で1名追加、途中他団体活動へ移る2名含む)と6種目の実践を指導する学生アスリート11名(1名の卒業生と1名の他大学生を含む、2日目より後発にて2名のプロアスリートが参加)が奥能登の地に到着した。のと里山空港では、角田氏の他に現地でのサポートスタッフとして大学生1名とこの春から都内の大学に進学する地元高校生1名が迎えてくれた。

空港よりマイクロバスと荷物車にて40分ほどの移動の後、輪島中学校に到着した。今回、最初のスポーツチャレンジの準備を始める。非常に大きな体育館でバスケットボールコートを手前3面は確保できる規模の会場であった。各種目ともに十分に活動スペースを確保できる余裕があった。参加する中学生も80名と今回訪問する中では最も多かった。約30分の準備時間に各ブースの設置のため受付テーブルの運搬、仕切り版の設置、放送設備の確認、スタッフおよび生徒たちの簡易名札の準備、ボールの空気入れなど用具の準備をスタッフ、アスリートで実施した。開始時間の少し前には続々とフロアに生徒たちが集まって来る。既に、照れながら、恥ずかしがりながらも興味深げにラクロスのクロスやボクシンググローブ、社交ダンスの華やかな仮面などを眺めながら学生アスリートたちと会話が始まっている。やがて、ちょんまげに甲冑姿の角田氏のアナウンスと共に会場中央に参加生徒、教員が集まり、学生アスリートによるデモンストレーションが始まる。

各種目のデモンストレーションが披露されるうち、会場の緊張感が高まり、生徒たちの歓声が響き渡る。スポーツチャレンジへの期待や意気込みが伝わってくるパフォーマンスが続いた。その後、学生アスリートからのアイスブレイク・プログラムを提供され、心身ともにウォーミングアップを終了し各セッション15分程度のスポーツチャレンジが開始された。



資料3 社交ダンス



少林寺拳法



フットサル

女子バレーボール部は、オール青山SC活動の指導、運営に毎回欠かせない協力を頂く。今回は4年生で主務を務めた藤森ころろさん、エースアタッカーの井上美虹さんが参加し、種目経験の有無を問わず大いにバレーボールを楽しめるプログラムを提供した。

ボクシングも学内イベントはオール青山SCの発足当初から毎回の協力を頂いている。奥能登支援2年連続参加の世界チャンピオン篠原光さん、篠原一三コーチの熱血パフォーマンスコンビが緊迫感のある師範で人気を博している。今回は男子部員を代表して川上祥空さんが初参加。当初から「ボクシングは危険というイメージを払拭し、正しく、楽しく基礎を学べばだれでも楽しめる」という想いから、各回で多くの参加者に理解を促し、普及に貢献している。

社交ダンスは、スポマネゼミOBの石垣和宏さんと早稲田大学在学中の荻谷芽唯さんのペアが担当した。2025年全日本大会で準優勝を獲得、春からは世界の舞踏界に本格的な挑戦をするため渡英する。こちらもオール青山SC発足当初から、子供たちへの社交ダンス普及

を目指し、各イベントで工夫を重ねている。その成果は今回の奥能登支援でも大いに効果を発揮した。なんと「仮面舞踏会」をイメージして種目参加者全員に美しい仮面を手渡し、着用していた。石垣さん曰く「ペアでダンスする際の照れ、恥ずかしさを軽減し、『素敵、カッコいい!』と感じて欲しい」との思いからの取り組みであった。これが効奏し毎回ブースは賑わい大いに盛り上がった。

ラクロスは、学内のキッズチャレンジでもレギュラー種目となり、奥能登支援では2年連続参加のスボマネゼミ4年生武田直起さんと初参加の2年生杉沼陽向さんが抜群の指導力を示して、参加生徒や先生方に対してラクロスへの興味を高め、大きな歓声上がるほど競技に集中する取り組みを披露していた。

少林寺拳法は、体育会クラブ木下恵太監督の社会貢献事業への深い理解に導かれ、多大な協力を頂いている。その真摯な取り組みは近年の全国大会好成績に繋がっている。学内キッズチャレンジでも迫力のパフォーマンスと軽妙な解説で多くの参加者を集める種目である。スボマネゼミには主将も在籍し「少林寺拳法を一般の方々に理解して欲しい」という想いをこのような機会を利用して強くアピールしている。男女ペアで金丸実結さん、スボマネゼミの小嶋智希さんが全国トップレベルの演武を披露した。2年連続参加となる奥能登支援でも圧巻の組手は参加生徒たちが息をのみ、一瞬にして会場に静寂をもたらす緊張感があった。

フットサルは、東京都リーグ所属の東京ヴェルディでゴレイロ（ゴールキーパー）を務める山後優人さん、マネジメントスタッフからスボマネゼミ所属の羽鳥健斗さん、同じくマネジメントスタッフとして帯同している岩手県出身で高校時代は東北リーグの強豪フットサルクラブに所属していた千葉大洋さんなどオール青山SC創設時からのエースたちが学内での指導経験を活かして担当する。男子はサッカー経験者の生徒が多かったが、いっぽうでは女子のみの参加者が互いに声を掛け合って一堂に会したタイミングには、フットサル特有の「自分の意志で突破する」プレーと、「周囲のバランスを気にしながら通すパス」などが組み合わせられ自己表現の場としても有効な時間となっていたことが印象的であった。

前述した今年のスポーツチャレンジの配慮すべき案件として、授業として参加しているため「体を動かすこと」に対して怪我のため制限がある、得意ではない、集団行動が苦手である、肢体不自由等の障がいがあるなどの理由から、積極的な関りが出来ない生徒さんに対するインクルーシブスポーツ活動の提供手段として「サッカーボールを作って遊ぼう」という主旨で開発されたモルテン社のボールキットを使用したセッションを設置した。既に学内のキッズチャレンジでは幼少の子供たち、高齢者、大人など親子でも一緒に取り組めるとインクルーシブな活動として成果を上げている。各会場にて学生スタッフが解説とサポート、完成後の解体まで参加者との対話も含めて対応した。各会場にてセッションごとに4～6名の参加者が訪れていた。以下には行動観察と参加者からのコメントに基づき活動概要を記載

した。

- ・先生と一緒に部活動での怪我によるリハビリ中の女子生徒が参加して、日常会話を重ねながらボール作りを楽しんでいた。スポーツ企画でも無理なく気軽に参加できるツールとして有用であった。
- ・動くのは苦手だが模型作りは好きなのでチャレンジに来たという男子生徒。2セッションの時間を費やして完成。
- ・ボールキットの数に限りがあるので2～3人でチーム編成して作業を進めた。2人の男子生徒たちは、会話を重ねながら作り上げ、完成後には「なかなか思ったところに蹴れないな」と言いながら笑顔のパス交換。
- ・先生方も興味を持って真剣に取り組んだ。担当の学生やスタッフと相談をしながら進める様子はスポーツ活動同様にコミュニケーション促進に有用であることが示唆された。

後述するが生徒たちのアンケート回答から、セッション時間の延長等の希望が多数あったように充実したセッションが続いたようである。最後に生徒たちからのスポーツチャレンジへの感想等を口頭で発表してもらい、参加生徒全員に参加証と記念メダルを学生アスリート達から贈呈し、互いに全員とハイタッチをして退場しセッションが終了した。

会場の輪島中学校を後にする際に正門脇のテニスコートの改修風景が垣間見られた。砂入り人工芝を剥がされ、下地のアスファルトが震災の影響で波打つように畝っていた様子が痛々しかった。思う存分スポーツを楽しむ環境は被災から2年を経過した現在でも整備されるには時間を要するようである。

40分ほどの移動の後、2泊をお世話になる能登町「宮地交流宿泊所こぼし」に向かう。20年ほど前に廃校となった小学校改築を改築し宿泊施設となった。到着後、宿泊施設の片付けボランティアを皆で行うこととなった。寝具、食器の準備、清掃等を役割分担し、担当する。

大人数の宿泊となるため入浴は30分ほど移動し地元温泉に向かう。宿舎にて地元で農業をされているご夫婦のご協力を得て、夕食を作るグループと分担して作業を進める。宿泊初日で自炊による夕食準備には学生スタッフも力が入る。宿舎を運営する方々と近隣にお住いの皆さんもお招きして学生たちと共に会食形式でのひと時となった。地元の皆さんは勿論のこと初対面であり、加えて学生スタッフ同士もほぼ初顔合わせという中、地元食材により地産地消（お米は農家のご夫婦から提供、2日目には地元漁師さんからの鮮魚の差し入れ）のメニューの後押しもあり、有効な情報交換の場となり、大いに収穫のある交流となった。

最後のプログラムは、これまでオンライン会議でしか顔を合わせなかったスタッフ全員で角田氏からの被災地の現状報告と翌日以降のスケジュール確認が行われた。

遠方からの移動、初のスポーツチャレンジ実施など日中の疲労が見える中だったが、翌日からの日程にむけ各自意欲を蓄えている様子であった。

3月17日（火）

※移動：マイクロバス20名、荷物車2名

※ツェーゲン金沢 午後から廣井さん、辻尾さん合流

朝食・宿舍出発

9:15会場到着

10:00～11:30 （1・2年生29名）

給食&懇談（柳田中学校と能都中学校に分かれて参加）

キッズチャレンジin 柳田中

能登町 柳田中学校

13:00会場到着

13:30～15:00 （1年生50名）

キッズチャレンジin 能都中&松波中

能登町 能都中学校

※集会所への移動 マイクロバスバス1台

※能登高校への移動 徒歩12分

16:00～「おちゃっこタイム」 久田（さうでん）集会所ほか

16:00～「田上選手のランニング教室」能登高校陸上部・野球部

※終了後、マイクロバスにて両会場を回り柳田温泉へ

18:00～19:00 風呂タイム

19:30 宿舍帰着・夕食作り（保志場さんご夫婦お手伝い）

※地元漁師さんよりイワシの差し入れあり

資料4 日程：3月17日

早朝から食堂では、昨晚より準備していた炊き立てのご飯、おかず等を各自のペースで盛り付けて朝食を摂ることとなる。第2日目は、午前、午後、夕方とイベントは満載である。午前中には新たなアスリート、スタッフ、視察の皆さんがそれぞれ空路、新幹線からのレンタカー利用などにより合流する予定である。新たなアスリートとしては、陸上十種競技のトップアスリートである田上駿さん、フットサル指導を担当する仙石来夢さん、記録映像撮影を担当する加藤琢也さん、学生スタッフ1名、昨年に引き続きサポート頂く高等部教員の小島快之先生、他大学からの視察の先生方である。筆者は多くの出入りがある本日、会場と空港の送迎を担当する。午前中の会場は昨晚から疲労回復の入浴でお世話になっている能登町柳田温泉の麓に位置する柳田中学校である。3年生が卒業する現在、全校生徒が約30名在籍するという。到着から約30分をかけて各競技の準備を始める。本日から視察の玉川大学教育学部の山田信幸先生とアスレティックデパートメントの内藤誠哉さんが既に会場に待機している。滞りなく準備が始まったことを見届け、入れ替わりで筆者は空港に向かう。残り1時間ほどのセッション途中で無事に後発の皆さんが合流する。すかさず各チャレンジに参加するアスリートや指導者たち。生徒たちとも速やかに打ち解けるコミュニケーション能力は百戦錬磨のなせる技である。校長先生はじめ教員も生徒たちと一緒に様々な競技にチャレンジする。むしろ生徒たちよりも積極性溢れる取り組みである。背中で語る指導の実践である。午前中のセッションが終了し、昼食は柳田中学校に居残るグループと午後のセッション会場である能都中学校グループに分かれて給食を共にしながら懇談会を行う。スポーツチャレンジの時間は、落ち着いてじっくりと会話をする機会を確保できなかった。同じテーブルに着

き、給食を共にしながら日常会話を交わすことは多くの気づきや学びをお互いにもたらしたようである。



資料5 試合前のエール



ボールキット



ラクロス

柳田中学校からの移動組を迎えて、既に準備に取り掛かっている先発組に合流して間もなく午後のセッションが始まる。田上さんの陸上競技チャレンジが追加され生徒たちの選択肢が増える。参加者は会場の能都中学校と松波中学校から来訪してくれた生徒を含めて約40名。既に各競技のアスリートたちと会話し、見よう見真似でプレーを楽しみ始めている。フットサルは元なでしこリーガーで、オール青山SCでは一昨年まで毎週火曜日開催の「なでしこひろば in 青山学院」、昨年度からは「グラスルーツ大人部門」のリーダーを務め、2年連続で奥能登支援に駆けつけてくれた仙石来夢さんの指導に生徒たちの集中力が更に向上した。また、昨年に引き続き石川県サッカー協会北野孝一会長、Jリーグのツエーゲン金沢クラブアンバサダーの廣井友信さん（駒澤大学出身）、辻尾真二さん（中央大学出身）が訪れスポーツチャレンジをサポートする。地元サッカー界のレジェンドの出現に生徒たちのモチベーションも更に喚起された。会を盛り上げる術を熟知した廣井さんの活躍には感謝の言葉が尽きない。いっぽう、仮面舞踏会の企画で大人気の社交ダンス石垣さん、荻谷さんペアは午後のセッション終了で離脱する。昨年度の奥能登支援以降、大学内のキッズチャレンジへの指導参加は勿論のこと、千葉県内の小学校の情操教育の一環として社交ダンス体験を指導するため招聘されるなど普及活動にも熱心に取り組んでいる。そのうえに、相乗効果ともいえるような全日本選手権での準優勝を獲得するという著しい成長を示した一年でもあった。また、ボールキットでは多くの来場者があり「作ったボールが欲しかった」とコメントしてくれた生徒も見受けられた。大学生とじっくりコミュニケーションを取りながらボールキット組み立てに取り組み、その後完成したボールで短い時間であってもパス等でボール遊びに興じるという体験を心地よく感じてくれたようである。最後には参加生徒たち全員に参加証と記念メダルを手渡すこととなる。この会場を訪れることの出来なかった部員の想いは、皆で手作りした参加記念メダルに込めて参加者全員に授与した。男女ラクロス部150名、女子バレーボール部より被災地を知る支援の一環として各クラブの代表者が生徒たちのために持ち寄ってくれた。

2時間のチャレンジが終了して片付けと共に、2チームに分かれて「能登高校陸上競技チャ

レンジ」と「仮設住宅集会所おちゃっこタイム」を実施した。能登高校へは徒歩で15分かけてアスリートとサポート学生で用具を運搬しながら移動した。田上さんがランニング講座を開講し野球部と陸上部総勢20名を指導した。併せて、大学社会連携機構CAS部会にて委員を務める星川精豪先生が医療担当として専門分野のトレーナーとしての補助トレーニングと「体の正しい使い方」をリハビリ選手に指導した。いずれもトップレベルの指導者からの提言や実技指導は大いに有用な情報となったようである。

3月18日（水）
朝食・宿舎出発
※宿舎チェックアウト・全荷物込み込み
※移動：マイクロバス20名乗車、荷物車
9:00会場到着
9:40～11:30（1・2年生86名）

キッズチャレンジin 珠洲
珠洲市 緑丘中学校

11:00～14:00 珠洲市仮設住宅「青空キッチン」
14:00～ 珠洲市鶴飼地区被災状況視察
移動
16:00のと里山空港到着
16:55のと里山空港→18:00羽田空港 到着・解散

資料6 日程：3月18日

早朝に開いた地元新聞の紙面には、前日の活動の様子が掲載され、青学生と生徒たちの取り組みが紹介されていた。交流のあった生徒たちの未来に少しでも関われたことは目指すべき成果であったといえる。

最終日は、各自朝食後に使用した部屋の掃除、寝具の片付けを済ませて宿舎を後にした。親子で運営する民泊の代表者の方からは我々の来訪に対して感謝の意を表された。山を越え40分ほどの珠洲市に向かう。会場となる緑丘中学校には、宝立小中学校、三崎中学校、大谷小中学校から生徒が合流し86名の参加者が集まった。4つの学校の生徒が一堂に会しチャレンジをするのは初の試みとなった。生徒アンケートにも記されたが「他校との交流が出来て楽しかった」と、ホスト校である緑丘中学校の生徒からの回答が見られたが、生徒数の少ない他3校では、より交流による楽しさを感じていたのではないだろうか。アイスブレイクから各種目チャレンジまで短い時間ではあったが、大学生との交流に留まらず同年代の生徒同士の絆も深まったことが予想される。



資料7 地元新聞掲載



バレーボール



陸上競技

3-3 被災地視察と仮設住宅訪問、交流会

初日の空港到着後、輪島市に移動し現地食堂にて昼食をとる。被災後に障がい者を従業員として迎え、温泉を備えた食堂を営む施設であった。このような食事でも現地での就業機会を生み出し、食材の地産地消を促す支援活動の一環として重要な役割を果たすと認識している。また、学生たちは店内の地元お土産コーナーで「NOTO NOT ALONE」ロゴの入ったTシャツを見つけ地元支援のため次々に購入していた。偶然とはいえ、昨年購入した復興を応援する商品に再会し、これも現地とのつながりを感じる出来事となった。

その後、徒歩で沿岸部の「朝市」跡へ移動する。事前ミーティングでは、目の前にある朝市の景色が、夜間に炎で包まれる映像を幾度となく視聴している。賑わいのあった地域は、原野となり次なる出発の時を静かに待っている様子であった。



資料8 ロゴ入り支援Tシャツ



市内視察



宿舎にて交流会

第2日目の夕方には能登町の久田（きゅうでん）集会所、三波（さんなみ）仮設住宅集会所にて現地ボランティア団体「ラブ&ピース」のみゆきさんのコーディネートにより、近隣の高齢者の皆さんとお菓子、飲み物を囲みでの交流会を実施した。筆者は田上さんの講座を担当したため詳細は参加スタッフのアンケート回答と聞き取りから報告する。

「三波でおばあちゃん、おじいちゃんとたわいもない話をして私の言葉で内気で少し控えめだった方がすごい笑顔になってくれたり、次はその方から話しを続けてくださったりすることが嬉しくて、親族でない遠くにいる誰かにまた会いに行きたいと思う感覚が初めてで、会いに行きたいだけでなく、幸せになって欲しい、元気に毎日笑って過ごしていて欲しいと思うようになりました。以上の経験から誰かが自分の言動や言葉で笑顔になってくれる瞬間が自分にとって大きな事であるということに気づかされた。」

「今回全体を通して1番嬉しかったのは、おちゃっこで『あなた達が来てくれるだけで場

が明るくなる。ありがとう。』と言われたことです。この言葉を聞いた時、本当に被災地に行ってお話するだけで力になれるんだと思えました。また、まだまだ精神面で支える支援が必要だとも感じました。私はその事をもっと色々な人に知って欲しいです。」

約90分に及ぶ交流の中で、各会場で気づきや学びが多かったことが伺える。また、ボランティア活動に携わった当事者に共通の気づきが他の報告でも考察されている。奥能登でポッチャ大会を主催している株式会社電通ボランティア部の代表山口剛さんが著した報告²⁰⁾を参照する。対象となったのは山口さんが携わった車いすバスケットボールの体験イベントで担当したある親子との体験である。「イベントの最後には、参加者全員が自分の決めた『一歩チャレンジ』を行う。ボールを支えることもままならないほどの握力の子が見事に、『かごシュート』を決めました。その瞬間、突然、ものすごい感動に襲われたのです。『子供を手伝い、よい経験を与えたのはこちらのはずなのに、その何倍もの感動を、私の方がこの子から与えられた!』これがボランティアの本質か、と気づいた瞬間でした。」と他者のためにという目的で実施した行動が、実は自分の喜びとして何倍にもなって戻って来ているといった内容である。今回この支援活動に参加したアスリートや学生スタッフは至る所でこのような感覚を実感したのではないだろうか。

長い一日を終えて、入浴、夕食を経て最終日の夜を迎えることとなった。室内でのミーティングは定刻に終了し屋外の広場にて満天の星空の元、焚火を囲んでこれまでの歩みやこれからの活動を語り合う時間となった。乾燥が続き、屋外での火気の取扱いに十分な配慮を要する昨今では非常に貴重な経験となった。勿論、火が消えるまで火元を離れず、消火用の水や機材を手元に置いての活動であった。

最終日には、珠洲市緑丘中学校のスポーツチャレンジを終えてから珠洲市内の仮設住宅の皆さんの協力を得て「青空キッチン」と銘打って、お住いの高齢者の皆さんと交流会を実施した。仮設住宅を出て青空の元、大学生や近隣の皆さんと対面でコミュニケーションを図るという主旨のイベントである。自宅の一部を集会所として提供している方のご厚意により、キッチンをお借りして持ち寄りの食材によりお昼ご飯を準備した。通りがかりの高齢者に声掛けして、立ち寄ってくれた方もいた。前掲の集会所での交流会同様に時間を経て、少しずつ話が進むと和やかな雰囲気会場を包む。なかなか、仮設住宅から外出しない高齢者には学生たちが訪問する形でお話をさせてもらえる機会を作っていた。地元の皆さんのサポートが無ければおくれや遠慮をして、取り組めないような活動も優しく後押しして頂けた。これも仮設住宅における高齢者の孤独死などが数多く取りざたされる中で、外部から来訪した我々のような立場の者に託された使命とも思われた。

青空キッチン終了後、空港まで移動途中で沿岸部に位置する鵜飼地区の被災状況、復興状況を視察した。2年が経過しても崩壊した家屋の取り壊し、廃材の改修などはこの地を離れ

る居住者の増加と共に進みが遅い印象は否めない。そんな中でも、大学生たちを迎え入れてくれた珠洲市の皆さんには感謝の念が絶えない。



資料9 仮設住宅訪問と交流会

3-4 支援活動とサーバントリーダーシップ

今回のスポーツによる奥能登復興支援活動に関わった学生運営スタッフは初参加の大学1年生の女子5名と大学内キッズチャレンジ、能登ボッチャ大会など学外支援活動を経験している大学3年生の女子1名の総勢6名である。いずれも自ら参加意思を表明し、各々の目標や目的を持って活動に携わっている。今回もスポーツ活動のみならず前項の地域貢献活動など含め、かなり広範な支援活動を実践している。その中で行動観察や現地参加者のアンケート回答から、学生運営スタッフの役割、行動が事業の進行や参加者の意欲的な取り組みに影響した一因ではないかと考察している。本項ではこの学生運営スタッフに焦点を当て、現地での活動に参加した生徒、教員からのアンケート回答、学生スタッフからの活動報告、回答、自己評価などにに基づき、その特質や学生自身の学びにどのような影響をもたらしたのか検討を加えるものである。

生徒たちから大学生との交流への回答は、「サッカーボールを作るときにいっぱい話しながら作ったことが楽しかった」、「あんまり話したことがないのに、大学生の方から話しかけてくれて助かった。」、「目線とかを合わせてくれて喋りやすかった。」、「こういう機会がないとできないような経験ができて楽しかった。」、「わかりやすく教えてもらえた。初めてのスポーツも楽しくできた。」、「たくさん話しかけてくれたり、ハイタッチなどをしてくれて嬉しかったし楽しかったです。」など大学生から積極的にコミュニケーションを取り、気配りをしながら対面していたことを生徒たちも敏感に感じ、取り組みへの意欲が向上したことが示唆される。

印象に残った活動や交流の項目としても大学生との対面で接した際の印象や配慮について記載があった。「大学生みんな優しく仲良くしてくれたことが心に残りました。」、「失敗しても優しく声をかけてくれたことが嬉しかった。」、「もっと青学生といっぱい喋りたかった。みんなとても優しくかったです。」、「給食も一緒に食べて頂いて、いろいろな話ができただこと。」などと評価している。

また、地元教員の回答から見られた大学生との交流への回答では「参加するつもりがなかったが、明るく声をかけられて参加してしまいました。」「学生さんたちがとても気をつかって生徒たちに接してくれていたことが良かったです。」「大学生の皆さんがとっても教え方が上手で、中学生がすぐに打ち解けることができた。」など大学生の生徒たちへの配慮や対応について評価している。対面で接して「大学生のエネルギーな姿で元気をもらいました。」と明るさ、対応に対する印象を記していた。さらに今後に向けて「準備や後片付けなども一緒に行えばさらに交流時間が確保できたのかなと思った。」など、より積極的な交流を求める具体的な提案もあった。

以上のような回答を分析する過程で参加者は学生運営スタッフの言動により、自ら活動へ意欲的に取り組もうとする態度が形成され、「参加しやすい活動環境を準備するため奉仕する」という姿勢、態度を継続していたといえる。チームマネジメントにおけるリーダーシップのタイプ別分析は多様である。特に近年は、サーバント・リーダーシップの重要性を指摘し、現代の社会構造や文化的な背景に即した様式として評価される報告が散見される。サーバント・リーダーシップは、Robert Greenleaf が1977年に提唱した“Servant first, Leader second”（リーダーは、まず相手に奉仕し、その後、相手を導くものである）という思想に基づくリーダーシップ分類である。その後、多くの研究者によってサーバント・リーダーシップの行動特性の分析、応用研究が試みられた。八尾坂²¹⁾は、「サーバント・リーダーは、フォロワーを力づけ成長させることを優先課題として、自らは謙虚さと誠実さのもと、フォロワーを受容し、方向性のあるビジョンを示し、組織全体の善のための責任者としての役割を有するもの」とその特徴を評価している。学生運営スタッフの報告からは、自分の力をどう生かすか、どのようなことが役立つのかなど多くの不安を抱えながら活動していたことが伺える。被災地で自分自身を役立てようと真摯に尽力した結果、その振る舞いや奉仕の気持ちが、参加者の心に届き、仮設住宅で暮らす高齢者から感謝の意を表される評価に繋がった。さらにこのような真摯な取り組み、懸命さが周囲のアスリート、スタッフにも伝播し、更なる活動を生み出していく。誰からも強制されることなく、背中を押されることもないままに、無意識に周囲の関係者たちが自らの意志で動き出すことを促す契機となった。その姿は、まさにサーバント・リーダーシップの本質が表出した時間であったことが示唆される。

学生運営スタッフに対して全体アンケートとは別に個別アンケートを実施して、より運営に特化した回答を得ている。質問内容は下記の通りである。①奥能登支援に行こうと思った理由、②想像していた活動との相違などがあったか、③活動において困ったこと、嫌だったこと、不満だったことは何か、④良かったこと、楽しかったこと、得られた成果は何か、⑤今後の課題や改善点等の問いに対する記述式回答となる。

マネジメントスタッフ（女子6名）

※文中の「ツンさん」はスタッフの角田寛和さん

スタッフアンケート1 「奥能登支援に行こうと思ったきっかけは？」

- ・地震発生直後、クラスメイトと共に募金活動を主導していました。大学受験のために活動を中断せざるを得ませんでしたが、受験後、他大学で行われた能登支援の講演を聴講し、改めて今の能登を自分の目で見て、何が必要なのかを考えたいと感じたことがきっかけです。
- ・友人に能登支援に深く関わっている人がいたことが大きなきっかけだった。その友人から春休みに能登へ行こうと誘われたことをきっかけに、うまく話がつながり今回の支援活動の存在を知った。せっかくの機会だと思い、自分も支援に参加してみようと考えた。
- ・震災前に家族旅行で能登へ行った経験があり、自然も能登にいる方も素敵でまた会いにきたいねと家族で話していたのですが、震災起きてしまっ、お世話になったお店の方などに連絡してみたのですがご連絡がなかったり、旅行で行った場所が崩れてしまっていることをインスタやニュースで知りました。何かやりたいと思いつつ、ボランティアは肉体労働のイメージが強かったので、行っても何もできないかな、なんなら足手まといになっちゃうかな、募金とかメッセージ送ることができる最大限かななどと思っていたら、スポーツマネジメントの授業でツンさんがお話に来てくださって、誰かを笑顔にすることやお話しすることは好きだったし、孤独死とかあってはならないと感じて、お話することで誰かを元気付けたり、少しでも生きる希望になるのかもしれない、私にもできることがあるかもしれないと気付かされて、先生にお伝えしたことがきっかけです。
- ・スポマネキャリア演習でツンさんがゲスト講師として来られていて、初めて能登があまりにも復興が進んでいないという現状を知ったことがきっかけです。私は、山口県出身で、あまり災害とかと関わりなく生きていたため、テレビや、インターネットのみでしか被災地の状況を知ることができずその、インターネットやテレビも2年も経てばあまり、被災地についての情報を発信することがなくなったため、勝手にもう復興が進んでいるものだと思っていました。しかし、ツンさんのお話や聞いて、被災地の復興があまりにも進んでいないことを学び、大きな衝撃を受けました。これは現地に足を運んで現地を見てもし何か私にできることがあるのならば、ほんと少しの力になるのならば、参加したいと思ったことがきっかけです。
- ・きっかけは、講義でツンさんの話を聞き、能登の支援活動を知ったことです。能登にはこれまで訪れたことはなかったですが、講義の少し前に金沢に行っていたこともあり、興味を持ちました。また、同学年のはなちゃんがツンさん主催のネパール支援に一人で参加したという話を聞き、自分も行動に移したいと感じ、能登支援活動への参加を決めました。
- ・12月に行ったネパール支援でした。ネパールに一緒に行った高校生やツンさんから奥能

登のお話を聞き、奥能登で被災後2年経った今でも支援が続いている現状を知りました。また、仮設住宅で暮らす高齢者の方とお話をするだけでも力になれるということも知りました。そんな中、自分が奥能登とどうやって関わっていくかを考えていた時に、スポーツマネジメントと授業でツンさんと宮崎先生がまたキッズスポーツチャレンジを能登でやることを聞き、運営という形で支援に関われるなら行くしかないと思いました。それだけでなく、おちゃっこで高齢者と関われるという点が、ツンさんから教わった微力な自分でも携われる支援の形そのもので、絶好のチャンスだと思いました。

スタッフアンケート2「想像していた活動は？」

- ・中学生と一緒に鬼ごっこをするなど、子どもたちの遊び相手や交流をメインとした活動を想像していました。
- ・「スポーツチャレンジ」とあったため、子どもたちと一緒にスポーツを楽しむ活動を想像していた。また、能登の災害支援として、被災地での瓦礫撤去などの肉体労働も行うのではないかと考えていた。
- ・キッズスポーツチャレンジは動画や資料を見ていたので、学生と一緒に体を動かして、その中でお話するイメージでした。ボランティア活動自体は瓦礫撤去や自分たちで調理する炊き出しのイメージでした。
- ・私は、ツンさんの授業を受けるまで被災地支援とは、瓦礫や土砂をのけたり、炊き出して食事を提供したりといった面での被災地支援しか知らず、被災地支援といえば、このような活動だと勝手に想像していましたが、今回の活動のような被災地の方の心をケアする、笑顔にするといった形の被災地支援もあるのだということを学びました。
また、キッズスポーツチャレンジの運営に関しては、子供達とアスリートの方が効率よく活動を行えるように、サポートしていく活動をするのだと想像していました。
実際は、サポートだけでなく、私たちも一緒に混じって様々なスポーツを体験するなど様々な活動を行えて、とても有意義な時間を過ごすことができました。
- ・事前に聞いていた通り、キッズスポーツチャレンジの運営として関わり、設営や撮影などの裏方の仕事を中心に行うと考えていました。また被災地支援活動であるため、炊き出しを行ったり、被災地を回って状況を知るような活動があるのも想像していました。
- ・ミーティングで説明されていた通り、運営側としてチャレンジ当日の選手のサポートや、料理など裏方の役割と、その他炊き出しなどのボランティアでした。

スタッフアンケート3「困ったこと、嫌だったこと、不満だった点」

- ・電車の遅延により、予定していた飛行機に搭乗できなかったことです。移動のトラブルにより、現地での活動時間に影響が出てしまったことが悔しいです。

- ・事前のミーティングに参加できず、共に支援するメンバーと初めて会うのが当日になってしまった。そのため、最初は緊張や不安が大きかった。
- ・強いてあげるならですが、宿泊施設の部屋の蛇口の水が飛び散ることや、想像通り暖房がないこと、水道の水が井戸水だからお勧めしないと教えていただいたので、薬を飲む時は少し困りました。運営においては、大まかな流れしかつかめていなかったもので、先輩方に沢山お聞きしてしまったことです。基本的に困ることや嫌なことなどなく、まだ何泊かしたいくらいの気持ちでした。
- ・大変だった点は、日程が想像していたよりもタイトだったことです。日程表は先に確認して、ある程度把握していましたが、実際行動してみると思った以上に時間がかかることが多く常に、ドタバタしていた印象があります。ですが、様々なことを体験出来て、とても有意義な時間を過ごすことができました。また、行き帰りの荷物の多さ重さには衝撃を受けました。
- ・私は2日目からの途中参加だったため、活動の流れや自分の役割が具体的には共有されていない状態で現場に入ることになり、到着してすぐは動き方が分からない場面が多くて戸惑いました。3日目には流れを理解して自分から動けるようになったので、事前の情報共有の有無が行動のしやすさに大きく影響すると感じました。
- ・準備期間のミーティングが自分の用事と被ってしまい、なかなか参加出来なかったため、他のスタッフの方に負担をかけてしまったことが申し訳なかったです。現場に行ってから変更があることは想定内だったので、その都度の変更に対して不満はありませんでした。不安だったのは、行きの飛行機の保安検査を全員が締切数分前に通過して、間に合わない可能性があったことです。また、ミーティングやメダル作成などで就寝時間が遅くなってしまったので、選手に負担がかかっていないか心配でした。

スタッフアンケート4 「良かったこと、楽しかったこと、得られた成果」

- ・想像以上に本格的なスポーツ支援に携わることができました。アスリートの方々から中学生が直接指導を受ける機会もあり、スポーツを通じて現地の方々と深く交流している姿を見たことは大きな学びでした。
- ・事前の関わりは少なかったものの、メンバーと協力しながら活動することができた。また、支援に参加した中学生たちが楽しそうに過ごしている姿や、喜んでいる様子を見ることができ、支援に来てよかったと感じた。
- ・想像と違った点は被災地見学です。現地の方の説明が入るとよりリアルになり、ここに家があるもととあって、いまは仮設の建物があって、電話で『おたくの家あった場所、今なんか仮設住宅が建ってるよ』と言っていたり、川に流された子のニュースを見て、実際にそ

の場所を目にし、その幅の広さや勾配、森に囲まれている様子を見て、まだ誰か迷子になっている人がいるんじゃないかと思い、ご家族が必死に探す訳もニュースで見ている時よりも現実味が増して、その場に足を踏み入れなければわからない、震災が本当にあって、それによってこんなにも生活も場所も家も崩れてしまったということを思い知らされました。また、震災で崩れた建物が残っていても、近づいてみると一階は半壊して二階部分しか残っていない住宅で、崩壊した一階では家屋の中に、電源コンセントやおばあちゃん家によくある雑貨など、生活がリアルに見える物がたくさんあった。どこか遠くののんに感じていた震災、能登が急に近いものになり、住んでいた人たちの生活を容易に想像できた。家屋の崩壊した様子を目の当たりにして、言葉も出てこなくて、なんて言ったら良いのかもわからなかった。家屋が崩れることにより日常生活が無くなるということが実際にここで起こったという衝撃がありました。今回、私が会場で会って、一緒にスポーツして、名前も呼んでくれて、サッカーいいじゃんとか褒めてくれた子達はこの震災を目の当たりにしたということを改めて感じ、キラキラした笑顔の裏には色々な思いがあるのではないかと考えさせられました。キッズスポーツチャレンジでは、みんな本当に明るくて、恥ずかしがりながらも一緒に手を繋いでダンス踊ってくれる子。男の子で多分私とパス練するのは嫌だったかもしれないけど、全然そんなこと思わせないくらい全力で一緒にバレーボールしてくれたり、ハイタッチしてくれたり、キラキラすぎる笑顔を沢山見せてくれた。私が褒めたりして笑顔になってくれる瞬間も嬉しかったです。

スポーツを純粹に一緒に楽しむことで自然に表現される、作られていない純粹な笑顔は何にも変えがたいとすごく実感する瞬間でした。また、初めましてで名前も知らなくて、中学生から見たらちょっと大人で怖いかもしれない大学生に、臆する事なく沢山話しかけてくれて、友達みたいにサッカーのコツとか教えてくれて、全力で動いて楽しんで、笑顔を見れたことが何よりも嬉しかったです。

イメージですが都会の中学生は警戒心が強かったり、クールな感じがするのですが、東京からの大学生をすぐに受け入れてくれる雰囲気や人懐っこさもあり、深読みかもしれませんが、何か震災で失ってしまったものや感じた事と関係があるのかもしれないとも思いました。

以上の経験から誰かが自分の行動や言葉で笑顔になってくれる瞬間が自分にとって大きな事であるということに気づかされた。三波でおばあちゃんおじいちゃんとたわいもない話をして私の言葉で内気で少し控えめだった方がすごい笑顔になってくれたり、次はその方から話を続けてくださったりすることが嬉しくて、親族でない遠くにいる誰かにまた会いに行きたいと思う感覚が初めてで、会いに行きたいだけではなく、幸せになって欲しい、元気に毎日笑って過ごして欲しいと思うようになりました。

最後に、その土地でお金を使うことも地域復興の一部になることも知り、その土地の方と

出会うと、その人たちのために何かしたいと思ったり、気持ちがすごく動いて、お店の方が地域を支えるという意味も少しわかったように感じました。こうしてボランティアの輪が広がって行くこともわかり、私も家族や友人に力説したので、ここからまた色々な方面に広がって行って欲しいとも思いました。

- ・私が今回の活動の中で一番嬉しかったことは、お茶っこにしても、炊き出しにしても、子供たちにしても、皆さんがほんとに私たちのことを温かく迎えてくれて、来たことをこんなに喜んでくれたこと、また来てねと言ってくださったことです。

前回能登支援をしていて感じたことなのですが、私はボランティアをするという気持ちで、相手に対して相手がプラスになるように支援するという気持ちで参加させていただいた活動は、終わって振り返ってみると、自分が相手に対して与えた元気より自分がもらう元気や、前向きな気持ちが多いことを改めて気が付き、参加して良かったと心から思いました。

- ・私は体を動かすことが好きなので、運営スタッフでも設営や撮影だけでなくスポーツ体験に参加できたことがとても楽しかったです。中学生の子どもたちと会話をしたり笑い合ったりする中で、自分自身も自然と笑顔になることができて良い経験になりました。

また、こぶしで地域の方と話した際に、支援活動を褒めていただき、直接感謝の言葉ももらえたことが大きな励みとなって心から参加して良かったと感じました。

- ・イベントの運営としての経験ができたことです。運営や、マネージャー的役割をするのは初めてだったのですが、事前準備から参加者にどのように喜んで貰えるかを考えたり、当日も選手たちが動きやすいように準備をしたりなど、誰かのために行動をするという良い経験になりました。周りを見て、後のことを先読みして動く力にも繋がったと思います。また、運営として直接お願いする側だったからこそ、賞状やメダル作成など見えないところで関わってくださった方々のありがたみを感じることが出来ました。当日は、被災地である能登での開催ということで、子供たちとどのように接すれば良いのか悩んでいましたが、被災地であることを忘れさせるぐらい元気な子達で、スポーツを楽しむ姿を見て逆に私が元気をもらいました。そして、もっとこの子達のためにできることがないか考えたいと思いました。言うまでもなく、子供たちと一緒に参加したスポーツチャレンジは全部楽しかったです。

ただ、そんな風子供たちを笑顔にしてくれたのは、選手たちの力なので、選手に感謝したいです。ボランティアに参加するだけあって、選手たちは素晴らしい方々で、何かお願いした時に快く引き受けてくれたり、拙い運営のなか助けられた場面が多々あったので、ありがたかったなと思います。子供たちから、また交流したいと言ってもらえたことから、今回のイベントが大成功だったことは間違いなくと思います！

そう言ってもらえたのは、みんなの人柄だけではなくて、スムーズにイベントを開催でき

て、思い切り楽しんで貰えたからでもあると思うのでやって良かったなと思います。このスポーツを通した繋がりやの輪がもっと広がって行って欲しいです。

今回全体を通して1番嬉しかったのは、おちゃっこで「あなた達が来てくれるだけで場が明るくなる。ありがとう。」と言われたことです。この言葉を聞いた時、本当に被災地に行ってお話するだけで力になれるんだと思えました。また、まだまだ精神面で支える支援が必要だとも感じました。私はその事をもっと色々な人に知って欲しいです。

私がボランティアにハマったのは、行った人しか得られない出会いがあるからでもあります。今回も、スポーツを本気で頑張ってきた人、豊富な人生経験をお持ちの教授、被災経験がありながら、前を向いて自分に何ができるかを考えて実践している同世代の子、災害ボランティアとして数々の現場を経験してきた方、長い人生を歩んでこられた高齢者の方々に出会いました。そんな方達から自分が知らない世界のお話を聞くのは刺激的でとてもワクワクします。自分にも何か出来るんじゃないかと思えたり、どんな人生を歩みたいか考えるきっかけになりました。またこれから自分が何かに挑戦する原動力になっていくと思います。

スタッフアンケート5 「今後の課題や改善点」

- ・活動時間が限られていたため全体を把握しきれていない部分はありますが、一部の運営スタッフに業務が集中している点が気になりました。運営の全員が積極性を持っていたため、逆に業務の取り合いのような状態があったと感じました。今後はリーダーシップをとる役割を明確にし、業務を分担し整理することで、運営側の疲労軽減と、円滑な協力体制が構築できるのではないかと感じました。
- ・このような支援活動について、より積極的な情報発信やアナウンスを行ったりすることで参加したいと考えている人へのチャンスが増えるのではないかと考えた。
- ・能登に入る前に、運営スタッフだけでも一度対面でミーティングを行うべきだと感じました。事前に持ち物の詳細な把握や役割分担の擦り合わせを済ませておくことで、初日の学校訪問の準備や進行がより円滑になるのではないかとこの意見です。
また、賞状などの配布物の個数把握は、出発前か、遅くとも初日の段階で完了させておく方が確実だと感じました。時間が限られていたので、特に初日に学校は活動開始前の名札作成などの準備段階で、参加者を待たせず、スムーズに誘導できるようにシュミレーションをしてイメージを共有しておくの良いかと思いました。
- ・今後の改善点として、来年青学から持っていく備品には、シールでもいいので全てに名前を振っておくことが大事なのかなと思いました。また、今回賞状が足りなくなったため、人数把握をきちんとすることだと思います。

- ・運営の役割や大まかな流れは事前に聞いていて、現場では対応力が大事になるとも言われていましたが、そのベースとなる具体的な動き方までは十分に分かっていなかったのも、主体的に動くためにも、共有があると動きやすいと感じました。私自身、途中参加だったこともあり、簡単な引き継ぎや説明があるとよりスムーズに活動に入れるのではないかと思います。

また、女性スタッフとして関わる中で、子どもたちが女性だと安心して話しやすいのかなと感じる場面もあった一方で、給食のときに男子中学生とは目を合わせて会話することが大変で関わり方の難しさも感じました。子供たちの年齢や性別に応じた関わり方を考えたり、席の配置などをもっと工夫したりする必要があると思いました。

- ・当日は色んな変更があり予定通りに行かないことが多いので、綿密な事前準備が必要だと思いました。特に、メダル作成は当日に持ち越さず、作りきっておいた方が余裕をもてたかなと思います。賞状とクリアファイルの数が足りなかったのも小さいことでも確認が必要だと思いました。ミーティングに関して、私も含め参加者が少ないことがあったので、予定のすり合わせをこまめに行ってなるべく多くの人が参加できるように努めたいです。当日の集合時間はもう少し早い方が良いでしょう。参加を希望していた学生が他に2人いたはずですが、連絡がうまく取れなかったため、最終的に不参加となってしまいました。これは支援の輪を広げる機会を逃したことに つながり、今後は防ぐべき課題だと感じています。

補足：全体アンケートからの回答

スタッフアンケート1「キッズスポーツチャレンジ全体を通しての感想意見」

- ・全体を通して本当にいい会だったと思います。様々な人と交流し、いろんな話をできたことは本当に有意義でした。また、被災地の現状なども間近で感じることができました。これは現地で見た人にしかわからないものがあると思うので本当に行って良かったです。スタッフの方々も優しい方ばかりで、親交を深めることができ良かったです。
- ・良かったこと：中学生のみんなが楽しんでくれていてとても良かった。改善点：バレーボールのボールが他のスペースに出てしまうことが多くて、運営が2人だけだと時々止められないこともあるので、設営位置を工夫するかつく運営の数を増やすべきと感じた。
- ・アスリートだけではできない部分のサポートを運営の方々々がものすごく手伝ってくれたので、とても助かりました！変更があっても、臨機応変に対応できていたと思います。今回はできていましたが、来年はさらに、早め早めの行動を全員ができれば、スムーズにいくと思います！

スタッフアンケート2「大学生や指導者との交流は？」

- ・学年関係なく生徒の方々と交流できたことはよかったです。食事の用意や、部屋の準備などやることを共有したことが大きかったなと思います。共同作業を通じて沢山の話ができたし、その人のことを深く知るきっかけになったと思います。
- ・中学生との交流について。今の自分にはなくなっていた純粋に楽しむという感覚を味わうことができた。
- ・この機会がなければ、関わらなかったであろう後輩や同期、プロアスリート選手の方、先生方、支援団体の方々に、まず、出会えたことに幸せを感じています。そして、本当に色々な話を自分の中に取り入れることができて、プラスになりました。視野の広さも今回の支援活動で少しは鍛えられたと思いました！

スタッフアンケート3「印象に残った活動や交流はありましたか？」

- ・印象に残ったのは最終日の炊き出しです。まさか自分たちで被災地の方々をお誘いするとは思いませんでしたが、自分から話しかけるという普段なかなかやらないことができたのは本当に新鮮でした。被災の話だけでなく、生活者の個人的な話が聞けてとても面白かったです。
- ・給食。
- ・印象に残った活動は、三波のお茶っ子です。ほのぼのとした雰囲気、なにそれ？？？っていうことがたくさんあって、おば様たちに教えてもらって、納得しての繰り返しで、それがとても楽しかったです！自分の中のコミュニティが広がっていく感じが良かったです！

スタッフアンケート4 各種目の感想

1 ボクシング

- ・行きたかったです
- ・スパーリングみんな楽しそうだった。

2 ラクロス

- ・一体感のある体験会でした！実際に道具を使ってできるなんて貴重な体験をありがとうございます！

3 少林寺拳法

- ・意外と子供たちがミット怖がることなくやってくれて良かったです！
- ・盛り上げ方が上手。

※ 4, 5 なし

6 社交ダンス

- ・とっても楽しかったです。仮面舞踏会なんて素敵なアイデアだと思いました！子供たちの

食いつきも違いました！

7 陸上競技

- ・音楽があって楽しかった。

8 ボールキット

- ・作りながら子供たちとリラックスして会話できたのが良かったです。

スタッフアンケート5「生徒同士、先生たち、他校生徒との交流はいかがでしたか？」

- ・とにかく繋がり大切さ素晴らしさを学びました。このキッズスポーツチャレンジに参加しなければ出会えなかったひと、聞けなかった話、見ることが出来なかった笑顔、様々なものに触れとても心が温まる会でした。特に、人と話すことは大切だと思いました。被災地の方々はとてもおしゃべりで話したいことが尽きない様子でした。孤独な日が続く、人との交流が減ってしまったのが原因なのかなと思いました。そんな中で、おちゃっこや、炊き出し、キッズスポーツチャレンジを通じて沢山の方々の話を聞くことが出来てとても楽しかったです。
- ・今回関わった中学生の中にも、たくさんの方が被災していると思います。そんな中でも、元気にスポーツをしてくれて、私が中学生から元気をもらいました。大学生にはない純粋さやエネルギーがあって、いいな！青春じゃん！って思いながら、私も楽しませてもらっていました。本当に感謝しています！

スタッフアンケート6「次回開催に向け、希望や改善点があれば教えてください」

- ・自分事ですが、被災地についてももう少し勉強していけば良かったなと思いました。現地の状況だけでなく、その地域の特産や有名人とか。色んな話題に繋がれたなと思いました。次回があれば改善したいです。
- ・満足した支援活動でした！

4 まとめ

本研究では、スポーツを通して被災地復興支援活動を実践することによる学生の行動変容、自己評価を経時的に観察、評価し、教育プログラム開発に向けた成果と課題を検討することを目的としている。今後はさらに、このような活動が社会課題と積極的に対峙し、取り組む人材を育成し、持続可能な循環型人材育成活動として寄与することを期待する。学生アスリート、学生運営スタッフに加え、学院内教職員により総勢30名に及ぶプロジェクトチームが構成された。2026年3月16日～18日の3日間で輪島市、能登町、珠洲市の中学校4会場にてスポーツチャレンジを実施し、能登町、珠洲市の仮設住宅集会場等にて高齢者を中心と

した交流会を主催した。これらの活動に携わった学生たちの成果を行動観察、インタビューおよび約 200 名の現地参加者からのアンケート回答などから評価、検討を加え、課題を見出した。社会課題解決への取り組みはスポーツ活動との親和性が高いことが指摘されている。スポーツ活動を多角的にサポートする本学独自のキャリア形成の可能性を有している。スポーツ事業の現場は教育的効果を発揮する題材ともなる。3 日間の取り組みから、学生たちは現地の参加者、高齢者の皆さんとの交流は勿論のこと、キャンパスを離れ協働するスタッフ間でのやり取りからも多くの学びがあった。本研究より示唆された成果及び課題は以下の通りである。

1 スポーツによるアントレプレナーシップ教育プログラム開発への示唆

スポーツによる多様性、インクルージョンを実践するプログラムを企画、実践するコミュニティへの参加は、コミュニケーション、決断力、創造力、相手へのリスペクトなどの素養を向上させる。まず「行動を起こし、無ければ作る (0 → 1)、迷いがあるならやる」といった積極的な挑戦を繰り返す、強靱で柔軟なメンタリティを獲得する。互いに自分を表現する機会、相手を思いやり理解しあうといったヒューマンリレーションシップが醸成される。

2 サーバント・リーダーシッププログラムとしての有用性

“Servant first, Leader second”（まず相手に奉仕し、その後相手を導くものである）というサーバント・リーダーシップを体現するための実践的なプログラムとして期待される。スポーツ活動が地域コミュニティ創出に留まらず、被災地支援に応用されることにより、社会との関わり方をスポーツ活動から理解し、表現する機会を作り出していく。被災地で自分自身を役立てようと真摯に尽力した結果、その振る舞いや奉仕の気持ちが、参加者の心に届き感謝、評価されることにつながった。さらには、その懸命さが周囲のアスリート、スタッフにも伝播し、更なる活動を生み出していく。無意識に周囲の関係者たちが自らの意志で動き出すことを促すこのような姿勢こそ、まさにサーバント・リーダーシップの本質ではないかと考える。

3 ロールモデルの有用性

学生マネジメントスタッフや学生アスリートが参加対象者である中学生や小学生と関わることによりロールモデルとして明確なビジョンを持ち、具体的な目標設定が可能となる。このような関係性がキャリア形成に重要な影響をもたらす可能性が示唆された。

※ 1 2022 年度より、学院内体育関連科目教員有志（中等部、高等部、大学）により発足し「学院内をスポーツでつなぐ・地域と学院のスポーツによる連携」を目的に学院内施設で、専門指導者と生徒・学生の運営により活動し、「研究と学びの場」を提供するボトムアッププロジェクトである。同様の主旨にて 2024 年にはプロジェクトメンバーが主体となり、より広範な活動を目的として一般社団法人オール青山スポーツコミュニティが発足した。

参考文献

- 1) 阿部利江. 災害ボランティア活動を通して福祉や防災を学ぶ: 東日本大震災における避難所での支援活動より. 東北福祉大学研究紀要, 2021, 45: 179-201.
- 2) 江田英里佳; 巻誠一郎ほか. 災害とスポーツ: 大規模災害時におけるスポーツの意義を考える. 身体文化論28: 身体運動文化学会第27回大会シンポジウム, 2023, 28.79-92.
- 3) 藤原輝夫, 「学びと社会を結び直す」東大総長が説く、アントレ教育の可能性と未来, Forbes JAPAN 68-69, no.120 2024
- 4) 池田孝博, et al. 大学を拠点とした総合型地域スポーツクラブの運営に関する諸問題. 福岡県立大学人間社会学部紀要, 2010, 19.1: 1-8.
- 5) 金賢吾, 原田拓真, and 神野賢治. 地方自治体におけるユニバーサルスポーツの推進: 富山県魚津市のボッチャ大会を事例に. Diss. University of Toyama, 2024.
- 6) 舞寿之, et al. 大学を拠点とした総合型地域スポーツクラブに関する研究-桃教スポーツアカデミーの実践より, 桃山学院教育大学研究紀要, 2023, 5: 76-90.
- 7) 宮崎純一. スポーツによるアクティブラーニングプログラム開発〜奥能登被災地復興支援活動の事例報告〜. 青山経営論集, 2025, 60.1: 47-65.
- 8) 宮崎純一. アントレプレナーシップ教育プログラム開発 ―スポーツ実践プラットフォーム構築のための事例研究―. 青山経営論集, 2026, 60.4: 145-184.
- 9) 宮崎純一. スポーツによる被災地支援活動と共生コミュニティ創生〜能登町ボッチャ大会の事例報告〜. 青山経営論集, 2025, 60.3: 1-30.
- 10) 宮崎純一. スポーツ活動によるウェルビーイング・コミュニティ創生ウォーキングフットボールによる東日本震災被災地の南三陸地域支援活動の事例研究〜. 青山経営論集, 2025, 60. 別冊: 19-44.
- 11) 宮崎純一. スポーツアントレプレナーシップ開発プログラムに向けた実践: スポーツキャリア関連講座の事例考察. 青山経営論集, 2024, 59. 4: 3-17.
- 12) 永谷稔; 築瀬歩; 梅垣明美. 大学を拠点とした総合型地域スポーツクラブ化への模索について. 北海道浅井学園大学短期大学部研究紀要, 2005, 43: 43-52.
- 13) 中村好男. 総合型地域スポーツクラブを通じた大学と地域との連携. In: 日本体育学会大会号第52回 (2001). 一般社団法人 日本体育学会, 2001. p. 38.
- 14) 二宮雅也. 共生社会とスポーツボランティア. 日本体育・スポーツ・健康学会予稿集 第72回 (2022). 一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会, 2022.
- 15) 野口亜弥. ウェルビーイングに向けた教育―SDGsをスポーツから考える―. 「体育社会学の課題と展望」. 大修館書店. 2025. : 232-244.
- 16) 渋谷順. スポーツビジネスにおけるソーシャルマーケティング〜地域・社会課題解決型スポーツビジネスの実践と展開〜. 日本スポーツ産業学会第33回大会号, 2024:15.
(発表時提示資料 <https://www.totteikobe.jp/project/>)
- 17) 鈴木直文. ダイバーシティ・インクルージョン・エクイティ再考―社会的包摂にスポーツはどう貢献できるのか―. 体育の科学2025,75.6: 404-409.
- 18) 炭谷将史. 大学を核とした地域密着型スポーツクラブの意義と課題〜大学側の視座からの考察〜. 聖泉論叢, 2014, 21.
- 19) Uwe Flick, 小田博志 (監訳). 新版質的研究入門―〈人間の科学〉のための方法論. 春秋社, 2011
- 20) 山口剛. 「ボ部」のすすめ. 東京大学 経友, 225号, 2026
- 21) 八尾坂修. アメリカの校長におけるサーバント・リーダーシップの行動特性と役割効果. 玉川大学教師教育リサーチセンター年報 14. 2024: 59-79.
・スポーツ庁, 第3期スポーツ基本計画,

https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop01/list/1372413_00001.htm

・公益財団法人日本サッカー協会公式サイト

https://www.jfa.jp/social_action_programme/

・一般社団法人オール青山スポーツコミュニティ公式サイト

<https://all-aoyama-sports-community.com/news/>

資料 参加した教員からの回答

教員アンケート1「キッズスポーツチャレンジ全体を通しての感想意見

- ・みんなが熱心で交流ができていてとても良かった。
- ・短時間でポイントをつかんだ指導がされ、生徒も私も挑戦しやすかったです。
- ・たくさんの競技にチャレンジできたことや大学生とふれ合えたことが生徒たちにとって貴重な時間となった。時間がもう少しあればよかった。
- ・もう少し長い時間活動できてよかった。
- ・普段なら体験できないスポーツを通して、生徒が大学生の皆さんと関わり、交流することができていたところがとても良かった。
- ・なかなか体験できないものもあり生徒全員楽しそうだったため参加してよかった。
- ・体験を終えて、全てのスポーツに挑戦したかったと思いました。

教員アンケート2「大学生や指導者との交流は？」

- ・大変素晴らしかった。
- ・参加するつもりがなかったが、明るく声をかけられて参加してしまいました。
- ・大学生の皆さんがとっても教え方が上手で、中学生がすぐに打ち解けることができた。
- ・生徒たちにとってよい刺激になった。給食を一緒に食べられてよかった。
- ・大学生のエネルギッシュな姿で元気をもらいました。
- ・準備や後片付けなども一緒に行えばさらに交流時間が確保できたのかなと思った。
- ・体験をしてそのスポーツの良さや楽しさを感じることができたことがとても良かったです。それと、学生さんたちがとても気をつけて生徒たちに接してくれていたことが良かったです。困ったことはとくにありませんでした。

教員アンケート3「印象に残った活動や交流はありましたか？」

- ・恥ずかしかったけどおだてられてやってしまったダンス。
- ・ボクシングのパンチの打ち方や相手のパンチの避けかたを教わりました。
- ・活動前のアイスブレイクで、生徒たちの緊張感がほぐれたので良かった。

- ・給食がよかった。
- ・自分で選択して体験するやり方はいいですね。それぞれのスポーツで頑張っている学生さんと交流できたことが、キャリア教育の観点からとてもよかったと思います。

教員アンケート4 「各種目の感想」

- ・社交ダンスのステップで「グー・チョキ・パー」による教え方がとても丁寧だった。
- ・陸上競技ではジャンプの歩幅がすごかった。
- ・ボールキットでこのように形作られることを知れて楽しかった。
- ・ボクシングでパンチの打ち方や相手のパンチの避けかたを教わりました。
- ・社交ダンスで仮面をつけることで恥ずかしさが消えました。
- ・ボールキットは思っていたよりも難しかったが、完成した時の達成感が良かった。
- ・少しですが、ボクシングを体験して、ボクシングの試合の見方がすこし変わりそうです。
- ・ラクロスを体験して予想以上に楽しさを感じることができました。のりが良かったです。

教員アンケート5 「生徒同士、先生たち、他校生徒との交流はいかがでしたか？」

- ・様々な先生たちや生徒たちとお話ができて楽しかった。
- ・みんななりきっていて良かったですね。
- ・能都中の1年生と競技を通して会話できた。
- ・一流の選手の方々と交流できたことがとても貴重な体験だった。
- ・初めての競技に挑戦できて、生徒の競技に対する見方が変わった。
- ・生徒たちの表情がとても良く、とても楽しく笑っていたので、これが全てだと思う。
- ・良い機会になりました。
- ・田舎に住んでいると、学生さんのような若い人たちと接する機会がほとんどなくて、短い時間でしたが、交流できたことはとてもよい機会になったと思います。

教員アンケート6 「次回開催に向け、希望や改善点があれば教えてください」

- ・同じ体制で良い。
- ・丁度いい時間だったと思います。
- ・もう少し時間があればよかった。
- ・もっと時間を長くして、他の学年も活動したらいい。
- ・いろんなスポーツを体験したいです。できたらもう少し時間があれば良かったです。皆さんお忙しい中、遠いところから奥能登まできていただき、ありがとうございました。元気をいただきました。

参加中学生と回答数

輪島中学校会場 74 名

柳田中学校会場 27 名

能都中学校会場 41 名（能都中学校 32 名、松波中学校 9 名）

緑丘中学校 76 名

（緑丘中 60 名から回答 29 名、宝立小中 8 名、三崎中 5 名、大谷小中 3 名から実施せず）

生徒アンケート1「キッズスポーツチャレンジ全体を通しての感想意見」

- ・ いろんなスポーツを体験できて良かった。
- ・ 初めて聞いたスポーツを体験できたこと。
- ・ とても良かった。
- ・ いろいろなスポーツができて楽しかったです。
- ・ たくさんのスポーツを体験できてよかった。もっと時間があると全部体験できると思った。
- ・ 青学のみんなとたくさんスポーツで交流できてすごく楽しかったし、思い出になりました。
経験したことないスポーツができて嬉しかったです。
- ・ スポーツして楽しかったです。
- ・ もっとたくさんのスポーツをしたかった。
- ・ 2時間でたくさんの競技の中から時間を決めて4つ選ばせていただいたのでやったことない競技をできて嬉しかったです。
- ・ 普段することのないスポーツをたくさん体験することができて楽しかったです。
- ・ 色々なスポーツができて楽しかった。
- ・ 珍しいスポーツができて貴重でした。
- ・ 教えてくれる人とかみんなが優しくかったです。
- ・ 色々回れたからたのしめた。
- ・ 全部の種目のやつを体験したい。
- ・ 普段できないスポーツができて楽しかったです。
- ・ 様々な種類のスポーツを実際に見れたことが良かった。
- ・ 動けない人でも楽しめることがあって嬉しかった。
- ・ 初めてするスポーツがたくさんで楽しかったし、またやりたいとおもった。
- ・ バレーとかめっちゃうまくできたら褒めてくれたのでうれしかったです。
- ・ 少林寺拳法で習ったことは身を守るために役立つと思いました。ダンス、バレー、フットサルとっても楽しかった。
- ・ 青学生のみなさんが優しく教えてくれてとても楽しかったです。

- ・違うスポーツも挑戦してみたいと思いました。
- ・したことがないスポーツを体験することができた。
- ・たのしかった。
- ・普段できないスポーツを体験できて面白かったです。
- ・自分で好きなところを選んで一つの競技じゃなくてたくさんの競技ができたのがよかった。
- ・一生することはないだろうというスポーツを経験をすることができてとても楽しかったです。
- ・体験できなかったスポーツもしてみたかった。
- ・いろんなスポーツを学べた。みんなですることもしたかったリレーとか。
- ・やったことのないスポーツを体験できた。
- ・初めて経験する競技がたくさんあって楽しかった。
- ・いろんな珍しいスポーツを体験できてよかった。
- ・運動が得意ではない人ようにボールづくりなどもあっていいと思いました。
- ・体験したことのないスポーツができて初めてだったけど楽しくできた。
- ・知らなかったスポーツや知ってたけどやらなかったものがあってたのしかった。
- ・わかりやすく教えてもらったところが良かった。
- ・マニアックなスポーツを実際に体験することができたのが良かった。
- ・一つのスポーツじゃなくてあまりみんなに知られてないマイナースポーツも体験することができて良かった。
- ・もっと実践的なことをしたかった。
- ・良かったことはいろいろなスポーツが体験できたことです。
- ・なかなか触れてこなかったスポーツに出会えてとも良かった。
- ・全種類やりたかった。
- ・知らない競技とかを知れてよかった。
- ・思ったより珍しいスポーツが多くて楽しかった。作ったボール欲しかった。
- ・教えてくれる人が積極的におしえてくれてとても感謝してます。楽しかったです。
- ・自分がやったことがないスポーツばかりだったから良かった。
- ・したことのないスポーツを体験できてたのしかった。
- ・楽しかった。
- ・経験したことのない競技を見たり実際に体験したりすることによっていろいろな知識を得ることができたしそのルールやマナーを友だちと共有することができてとても良かった。
- ・よく知らないスポーツを教えてくれて興味が湧いた。
- ・知らないスポーツとかもできて楽しかった。
- ・青山学院大学ではこんなスポーツをしていることがわかった。

- ・したことないこともできていい経験だった。
- ・聞いたことがないスポーツを体験できてよかった
- ・時間を4つに分けたことで人が混雑せずスムーズに体験できて良かった。
- ・卓球やバドミントンがしたかった。けど、初めて知ったりやってみるスポーツがあって楽しかった。
- ・名前も知らなかったようなスポーツを体験できて楽しかった。
- ・やったことのないスポーツができてよかったです。
- ・やったことないスポーツがあって面白かった。
- ・したことなかった競技をすることが出来てすごく楽しかった。
- ・時間を増やすと良いと思います。
- ・いろいろなスポーツがあって良かった。
- ・少林寺拳法がすごく楽しかったです。色々なスポーツを体験して、知らなかったことや知りたかったことがたくさん知れてすごく面白かったです。
- ・体験したことがないのを経験できて良かった。
- ・いろんなスポーツができたこと。
- ・初めてやるスポーツとかができてよかった。
- ・めっちゃ楽しかった。
- ・やったことのないスポーツができてたのしかった。
- ・楽しかったです。
- ・バレーを教えてもらったのですが、とても丁寧に教えてくれて楽しかったです。またここに来てほしいと思いました。
- ・他の人とのコミュニケーションも取れるのがいいと思いました。
- ・普段できないスポーツを他校の人たちとできて良かった。
- ・運動が嫌いでもみんな楽しめるようなことをしてほしい。
- ・いろいろな人と触れ合えるのが良かった。
- ・やったことない、知らないスポーツを初めてやって、いい体験になったと思うし、楽しかった。
- ・自分のやってみたいことができて良かったし、初めてすることも体験できてよかったです。
- ・バレーができて良かった。
- ・いろんなスポーツを体験できて楽しかったです。
- ・初めての体験ばかりで面白かった。
- ・もっといろんなスポーツに触れたいと思った。
- ・やったことのないスポーツを体験することができた。
- ・楽しかったし、初めて聞くスポーツを体験できてよかった。

- ・それぞれ、以外なことで足が速くなったりなどでびっくりした。
- ・明るくて関わりやすかった。
- ・バレーでもっとこうすればうまくいくよと詳しく教えてくれた。
- ・みんな優しくて楽しかったし面白かった。
- ・楽しかった。
- ・したことないスポーツができて楽しかった。
- ・いろんなスポーツを体験できて楽しかった。
- ・知らないスポーツややったことないスポーツができて良かった。
- ・怪我をしていて参加できなかったけど、楽しそうだった。
- ・いろいろなスポーツができて楽しかった。
- ・もっといろんなスポーツがしたい。
- ・見学していてすごいと思った。
- ・やったことないスポーツがたくさんできて嬉しかった。
- ・フットサルのスペースを増やしてほしい。
- ・楽しかった。
- ・学年関係なく楽しめたから良かった。
- ・自分で気になるところを選んでやるところなどが良かった。
- ・ラクロスやボクシングが楽しかった。少林寺拳法や社交ダンスは初めて見たけどかっこよかった。
- ・社交ダンスを初めてして印象的でした。
- ・少林寺拳法など、聞いたことはあるけれど体験したことのないスポーツに積極的に参加できたこと。
- ・初めてのスポーツとかが体験できて良かった。
- ・なかなか触れることのできないようなスポーツを体験することができて良かったです。
- ・たくさん話しかけてくれたことが嬉しかったです。
- ・みんなが優しく、丁寧に教えてくれるから緊張しなかった。
- ・丁寧に教えてくれたところ。
- ・複数の競技の中から、自分で選んで挑戦できるところが良かった。
- ・3回じゃ、少ないくらい楽しそうなのがいっぱいあったから、まだやりたかった。
- ・楽しいだけでなく、しっかりとスポーツのことも学べた。
- ・全部が楽しかった 3年生になったら、またしたいです。
- ・もう少し時間を増やしてほしい (1つ1つの競技の)。
- ・普段なかなかしないスポーツを知ることができた。おもしろかった。

- ・ やってみたことのないスポーツを体験できて面白かった。
- ・ やったことがないスポーツがあって興味が湧いてよかったです。
- ・ いろんなスポーツを経験できて楽しい時間になった。
- ・ 次は卓球がしたいと思った。全てのスポーツでトップクラスの人たちが来てくれて嬉しかった。
- ・ いろんなスポーツができて楽しかった。
- ・ もっと交流時間が欲しいと思った。
- ・ 名前は聞いたことあるけれどやったことのないスポーツができてよかったです。
- ・ 体験できる回数を増やしてほしい。
- ・ 教え方が丁寧だった。
- ・ いろいろなスポーツに関われて楽しかったです。
- ・ もう少しスポーツの時間が増えたらより嬉しかった。
- ・ サッカーボールを作るやつが楽しかったけど作るのがすごく難しかった。
- ・ 体験したことのないスポーツもあってできて面白かったです。
- ・ 初めて知ったスポーツがあったけど楽しくできてよかったです。
- ・ したことなかったスポーツが体験できてよかったです。
- ・ サッカーが楽しかった。
- ・ 運動が苦手な人でもできる簡単なのをもっと作ってほしい。
- ・ スポーツをして楽しかったし、普段から経験したことのないスポーツもあって楽しかった。
- ・ 参加して、とても話しやすかったしスポーツも気軽に参加できたのでとても楽しかったです。
- ・ いろんなスポーツを経験することができたこと。
- ・ いろいろなことを学べた。
- ・ すべてのスポーツをしたかった。
- ・ 少林寺が楽しかった。
- ・ いろいろなスポーツに挑戦できた。
- ・ 全てのスポーツをしたかった。
- ・ もっと時間があったら嬉しかった。
- ・ 色々なスポーツを楽しめて良かったと思うが、1つのスポーツをする時間が短く感じたのでもっと長くしてほしいと思った。
- ・ 人気、不人気がはっきりとしていたのもっと不人気のところは頑張してほしい。
- ・ 楽しかったからもう少し時間がほしい。
- ・ いつもはしないスポーツができたから良かった。
- ・ もっと時間を長くしてほしい。

- ・自分が全く知らないスポーツを体験できてとても楽しかったし、印象に残った。
- ・全員テキパキしていたし自分も気になるスポーツの場所に行けて楽しかった。
- ・もっとたくさんの時間を使って行いたかった。
- ・みたことないスポーツとかがあって難しかったけどやってみると楽しすぎた。
- ・時間を増やしてほしい。

生徒アンケート2「大学生や指導者との交流は？」

- ・話しやすかった。
- ・あんまり話したことがないのに、大学生の方から話しかけてくれて助かった。
- ・新しいスポーツがわかった。
- ・ラクロスのゴールに決めるやつ。
- ・楽しかった。
- ・上手に教えてくれてよかったです。
- ・全部楽しかったです。
- ・ボクシングの構えわかりやすかった。
- ・目線とかを合わせてくれて喋りやすかった。
- ・たくさん話しかけてくれたり、ハイタッチなどをしてくれて嬉しかったし楽しかったです。
- ・優しく教えてくれて嬉しかった。
- ・たくさん教えてくれてりかひできた。楽しかったです。
- ・明るく話しかけてくれたりやり方がわからないときに教えてくれて嬉しかったです。
- ・こういう機会がないとできないような経験ができて楽しかった。
- ・体験するとき、わかりやすく説明してくれて楽しくすることができた。
- ・わかりやすく教えてもらえた。初めてのスポーツも楽しくできた。
- ・しっかり教えてくれて楽しかったです。
- ・ちゃんと教えてくれたし良かったです。
- ・分からない動きも分かりやすく優しく丁寧に教えてくれた。
- ・初めてやったスポーツでうまくできないところもあったけど、優しく教えてくれた。
- ・社交ダンスで、わからないことを教えてもらえてよかったです。
- ・優しく接してくれて安心感があった。
- ・優しく教えてくれて楽しかったです。
- ・わからないことを優しく教えてくれたり、実際にお手本を見せてくれたりしてうれしかった。
- ・バレーが楽しかった。
- ・ダンスなどではとても楽しく教えていただいたし、少林寺拳法のときは上手などと言われて、嬉しかった。

- ・サッカーボールを作るときにいっぱい話しながら作ったことが楽しかった。
- ・楽しかった。
- ・フレンドリーに話しかけてくれたので話しやすく楽しかったです。
- ・ルールなどが知れた。
- ・いっぱい話せた。
- ・大学生のみなさんがとてもフレンドリーで話しやすかったです。
- ・初めてでも優しく教えてくれて少しできるようになって嬉しかった。
- ・やさしくたくさん喋りかけてくれて嬉しかったです。できないところを教えてくれるのも嬉しかったです。
- ・初めてやるスポーツでもわかりやすかった。
- ・めっちゃ楽しかった。
- ・なかなかやるきかいがないスポーツができて楽しかった。
- ・大学生の大変なこととか聞いてよかった。
- ・地方から東京に行って困ったことなどいっぱい聞いた。
- ・たくさん話しができて優しくしてくれて楽しかったです。
- ・短い時間だったけど仲を深められたと思う。
- ・的確なアドバイスをしてくれてよかった。
- ・優しく教えてもらってうまくできたときはうれしかった。
- ・話し合ったときが楽しかった。
- ・相手方の方から積極的に話しかけてくださりとても話しやすかった。
- ・わかりやすく説明してくれて大学生の人たちとスポーツをするのが楽しかった。
- ・スポーツについてよくわかった。
- ・体験楽しかった。
- ・みんな優しく接しやすかった。
- ・優しく教えてくれた。
- ・わかりやすかった。
- ・ボクシングや少林寺拳法が楽しかった。
- ・いろいろな事ができたのでとても楽しかった。
- ・誕生日などいろいろなことを知れてよかった。
- ・大学生に教えてもらった護身術がとても役に立ちました。
- ・よく話せた。
- ・約二時間という短い間だったが友達と一緒に体験できたところがとても楽しかった。
- ・少林寺拳法がかっこよかった。

- ・優しくて面白かった。
- ・自分の苦手なところを知ることにより楽しめること。
- ・よかった。
- ・説明がわかりやすかった。
- ・知らないスポーツをわかりやすいよう教えられて良かった。
- ・フットサルの時にとても話しかけてくれて楽しかった。
- ・みんな優しくて安心した。
- ・スポーツの楽しさがわかりました。
- ・説明がわかりやすかった。
- ・ノリが良くて教えるのも丁寧で楽しかった。
- ・すべてたのしかった。
- ・たくさん話しかけてくれて楽しかった。
- ・面白い人がたくさんいてすごく話やすくとても楽しかったです。
- ・楽しかった。
- ・いろんなことを聞いた。
- ・わかりやすく教えてくれた。
- ・野球をしていて「野球頑張れ！」って陸上の人から言ってくれて嬉しかった。
- ・わかりやすく優しく教えてくれた。
- ・楽しかったです。
- ・人との関わりが苦手な私ですが、優しく接してくれて安心しました。
- ・初めて聞くスポーツなどがあった。
- ・自分より年上の人とでも仲良くできた。
- ・優しくささえてくれて嬉しかった。
- ・やったことのないスポーツや知らないスポーツが色々あってどれも楽しかった。
- ・知らないスポーツについて教えてくれた。
- ・皆さん優しく教えてくれたり、わからないところも教えてくれて良かったです。
- ・ボクシングの構えがわかった。
- ・スポーツが体験できた。
- ・みなさんフレンドリーで話しかけてくれて楽しくできた。
- ・優しく接してくれて楽しかった。
- ・教えてくれたり、大学生から話してくれて楽しかった。
- ・けんけんで足が早くなること。
- ・バレーのうまくなるコツを教えてもらった。

- ・大きくてビビりました、けど良かったです。
- ・見たことも聞いたこともないスポーツもあったけどやり方をしっかり教えてもらえて楽しかった。
- ・見たことないスポーツがあった。
- ・ラクロス楽しかった。
- ・一緒に給食たべれてよかった。
- ・いろいろなことがしれてよかった。
- ・知らないことがいっぱいあって楽しかった。
- ・動きがすごい。
- ・まあまあできた。
- ・いろんなことを聞けて嬉しかった。
- ・大学生と仲良くなった。
- ・話しやすい人ばかりで楽しかった。
- ・知らないスポーツとかをできて楽しかった。
- ・優しく教えてくれたから楽しめた。
- ・なかなか体験することのないスポーツなどができて楽しかった。
- ・笑顔で優しく教えてくれて嬉しかった。
- ・大学について色々聞いた。
- ・ボクシングやパレー、少林寺拳法でパンチやスパイクを打つコツを教えてくれ、とても充実した時間になった。
- ・みんな優しく話しかけてくれて話しやすかった。
- ・いろいろな大会ですごい結果を出している人と交流し、これから頑張るべきことを考えるきっかけになりました。
- ・スポーツ以外でも給食とかのときに話せて嬉しかった。
- ・明るく教えてくれたから楽しかったです。
- ・あまり大学生との交流がなかったからいい経験でした。
- ・アドバイスなどを優しく教えてくれて、楽しくスポーツができた。
- ・大学生も、指導者の人も優しく教えてくれて楽しかった。
- ・皆さんが気さくに話しかけてくれたから楽しさが増した。
- ・社交ダンスのサイドステップが難しかった。
- ・大学生の人が積極的に話してくれたため、こちらも話しやすかった。
- ・大学生みなさんが、爽やかで、接しやすく楽しく交流できた。
- ・盛り上げてくれたりして、明るい雰囲気を作ってくれて楽しかった。

- ・うまくできたら褒めてくれて楽しく出来ました。
- ・明るく接してくれて良かった。
- ・アスリートってこんな感じなんだなってしれたことが良かった。
- ・大学に行ってみたいと思った。
- ・色々話せた。
- ・大学生になったら勉強などで忙しいこと。
- ・話すのが上手だった。
- ・おもったよりも交流できてよかった。
- ・ボクシングを初めてやりました。
- ・いろいろなスポーツを教えてくれて楽しかった。
- ・新しい発見は、サッカーボールを作ったり解体するのが難しかった。
- ・大学生の人とたくさん話しできて良かったし、みんな面白くて楽しかったです。
- ・みんなノリが良くて話しやすかった。
- ・明るく教えてくれて楽しかったです。
- ・たくさん話せて楽しかったです。
- ・話しやすかった。
- ・困ったこととかはなかったけど青山学院大学さんとやってみてほんとにたのしかった
ですまたやりたいな。
- ・大学生みんなが優しくしてくれたし面白くて楽しむことができた。
- ・わかりやすく教えてもらって楽しかった。
- ・話していて、優しい言い方で安心しました。
- ・優しく指導してくれて楽しく取り組むことができた。
- ・知らないことがしれて楽しかった。
- ・知らない競技をしれた。
- ・ラクロスの人が面白かった。
- ・体を使ってわかりやすい説明だった。
- ・ラクロスと少林寺拳法という競技を知れた。
- ・明るくて面白かった。
- ・色々なスポーツの新たな発見や技能など色々な事ができてすごく楽しかった。
- ・男子なら、モテるとかと中学生が楽しめそうな言葉で大学生が誘っていた。
- ・知っていたけどやったことがなかったスポーツがあって、実際にすることができて楽し
かったし、大学生との交流もいつもとは違って良かったです。
- ・交流していろいろなスポーツを楽しめた。

- ・一からわかりやすく教えてくれて、仲良くできた。
- ・わかりやすく簡単に教えてくれるから初めてでもすぐに覚えることができた。
- ・今まで聞いたことのないようなスポーツも体験でき楽しむことができた。
- ・みんな明るくてはなしかけてくれたのではなしかけやすくてもっとたのしめた。
- ・体を動かすのは苦手だけど楽しく動かすことができた。

生徒アンケート3「印象に残った活動や交流はありましたか？」

- ・初めてするのばかりでたのしかった。
- ・バスケットをしたかったです。
- ・ダンスが印象に残った。
- ・狙ったところに打つのが難しい。
- ・ダンス。
- ・ボクシングのグローブを始めてつけました。
- ・社交ダンス、ラクロス、バレー、フットサル。
- ・ボクシング。
- ・社交ダンスが一番印象に残った。
- ・ボクシングとかやったことないスポーツができて楽しかったです。
- ・ラクロス、ボールづくり。
- ・ダンスとサッカーがたのしかった。ラクロスもやってみたかった。
- ・アピールタイムのときに目の前でやっていた時かっこよかったです。
- ・出来る、出来ないより楽しむことが大切だと思った。
- ・社交ダンスやバレーなど、どのスポーツも楽しく体験することができた。
- ・もっと時間が欲しかった。
- ・スポーツをして楽しいと思いました。
- ・ラクロスをはじめて体験した。
- ・ダンス楽しかった。
- ・フットサル。
- ・短い時間だったけどたくさんスポーツを体験できて良かったです。
- ・バレー。
- ・ボール作りで作るのも楽しかったけど解体するのも楽しかったです。
- ・フットサルやバレーがたのしかった。
- ・大学生みんな臨機応変に対応していると思った。
- ・名前忘れちゃったけれど、つえ？らけっ？みたいなやつでキャッチボールしたかった～！
- ・苦手なスポーツも頑張って取り組むことができて良かったと思った。

- ・ボールづくり。
- ・バレーボール体験は体育などで行っていたけれど体育でするよりも2倍楽しかったです。
- ・ボクシングは初めて行ったので詳しく教えてもらえて楽しかったです。
- ・少林寺拳法でいろいろな技があって面白い競技だなと思った。
- ・ラクロス。
- ・初めは難しかったダンスを少しできるようになりました。
- ・何人かでやる競技は協力するのが大切だなと思った。
- ・お手本を見せてくれるときたくさん練習したんだなって思えるぐらいめっちゃすごかったです。
- ・見た目は簡単そうに見えるけどやっていたら難しくて大学生がすごいとおもった。
- ・知らないスポーツもたくさんあったこと。
- ・社交ダンスめっちゃ楽しかった。大学生優しかった。
- ・普段なかなか見れない競技も見れた。
- ・もっと時間が長くあってほしかったなと思いました。
- ・優しく教えてもらってうまくできた。みんなと仲を深められてるなと思った。
- ・少林寺拳法で護身の技を教えてもらったこと。
- ・やってみると難しいスポーツがたくさん。
- ・マニアックなスポーツも、大体有名なスポーツと通じるところがあるのを感じた。
- ・ラクロス、ボクシングは優しく教えてくれてすぐに褒めてくれて嬉しかった。
- ・いろいろな種目があるとわかった。
- ・話すこと。
- ・写真を取ったこと。
- ・ボール作り。
- ・作ったボールを貰えるようにしてほしかった。
- ・スポーツは楽しい。
- ・少林寺拳法がおもしろかった。
- ・強い大学生はオーラがあってたくさん努力したんだなと伝わってきてすごかったです。
- ・少林寺拳法 ボクシング。
- ・少林寺拳法ではクイズを出してもらい一体どういうものなのかを知れたのが印象に残った。
- ・強かった。
- ・少林寺拳法がめっちゃすごい。
- ・ボクシングが意外と当てにくくて難しかった。
- ・フットサル。
- ・大学生のお手本で迫力があった。

- ・大学生と交流して知らないスポーツを理解できて嬉しいと思った。
- ・一つ一つのスポーツの時間がもっと欲しかった。
- ・ラクロスが楽しかった。
- ・とても親切に教えてくれて楽しかった。
- ・社交ダンス。
- ・ラクロスを初めてして見たことなかったけどすごく楽しく出来た。
- ・もっと時間がほしかった。
- ・フットサル。
- ・次はバドミントンをしてみたい。
- ・ボクシングの対決するとき。
- ・ラクロス楽しかった。
- ・ラクロスというスポーツをまたしてみたいと今思っている。
- ・ラクロスをして大学生があんなに速い球をとっていたのがすごかった。
- ・少林寺憲法です。
- ・時間がもっと欲しかったです。とても楽しくてずっとやってられました。
- ・大学生みんな優しく仲良くしてくれたことが心に残りました。
- ・失敗しても優しく声をかけてくれたことが嬉しかった。
- ・もっと人と会話がしたかった。
- ・知らない楽しいスポーツがまだありそうだと思った。
- ・バレーボールのところで春高バレーに行った人にスパイクのコツを教えてもらいました。
- ・少林寺拳法が印象に残った。
- ・優しく接してくれた。
- ・クイズをたびたび挟んできて頭に入るし難しかったけど楽しかった。
- ・最初の何人で集まるやつで、大学生の人と話せた。
- ・少林寺拳法が楽しかった。
- ・ダンスでちょっと恥ずかしかったけど楽しかった。
- ・みんなで笑い合っただけでよかったと思う。
- ・もっといろんなスポーツを試みたかった。
- ・大学生と話す時間が欲しかった。
- ・ボクシングで打ち方がわかった。
- ・ボクシング。
- ・ラクロス。
- ・もっといろんなスポーツがしたかった。

- ・ラクロス。
- ・もっと色々なスポーツしたかった。
- ・フットサルが楽しかった。
- ・球技をしたかった。
- ・ボクシング。
- ・ボクシングが楽しかった。
- ・バレーではサーブの仕方をおしえてもらった。
- ・バレー。
- ・ラクロス。
- ・ボクシング。
- ・バレーの時、分かりやすく教えてくれたから長い時間やりたかった。
- ・もっと回りたかった。
- ・スポーツを通して、大学生と交流できてよかった。
- ・社交ダンス。
- ・バレーでは、スパイクを打ったときにすごい褒めてくれて、自信になった。
- ・説明するのが上手だと思った。
- ・フットサルはみんなで声を掛け合って協力できた。
- ・ボクシングはしっかりとした構えや避け方を教えてもらい、思っていたよりも難しいなと思いました。
- ・優しくてまたやりたかった。
- ・社交ダンスが印象に残りました。とても綺麗だった。
- ・もっと青学生といっぱい喋りたかった。でもみんなとても優しくかったです。
- ・給食も一緒に食べていただいて、いろいろな話ができたと。
- ・自分が体験したことがなかったり、見たことしかなかったスポーツが、体験できたのが嬉しかった。
- ・最初の種目説明ですごく興味が湧いたこと。
- ・給食のときに話したときは、とても緊張しました。
- ・印象に残ったのはラクロスで、今までやってこなかったけど意外に簡単にできて楽しかったです。
- ・こんなスポーツがあるんだとか、今スポーツってこんななんだとか発見が沢山あった。
- ・色々な人と交流することで、いろんなことが学べることに気付いた。
- ・人と交流してスポーツをすると楽しいということがわかりました。
- ・ラクロスは動画でしか見たことがなかったけどやってみると楽しかった事。

- ・初めてプレイするものが何個もあって楽しかったです。
- ・やればやるほど難しいなと気付いた。
- ・久しぶりに体を動かせてよかった。
- ・一緒に食べた人が、彼女いないこと。
- ・教え方が丁寧で分かりやすかった。
- ・社交ダンス初めてで楽しかった。
- ・ボクシングを初めてやりました。とても楽しかったです。
- ・ラクロスで投げることができたこと。
- ・手を怪我していなかったら、いろんなスポーツのところに行きたかった。
- ・少林寺拳法。
- ・少林寺拳法 楽しかった。
- ・コツを教えてもらって初めて知ったスポーツもできて嬉しかったです。
- ・ボクシングで構えから動くやどこをパンチするかなどしっかり考えられました。
- ・サッカーが面白かった。
- ・印象に残ったはみんなでサッカーボールのパズルで作ったことです。
- ・大学生が最後まで楽しませてくれるのが嬉しかった。
- ・バレーで走って打つ練習が楽しかった。
- ・ボールを作るときに、丁寧に説明していて簡単に作れました。
- ・他の学校の友達や大学生と交流することができて良かった。
- ・少林寺でいろいろなことを教わったこと。
- ・ラクロス。
- ・少林寺拳法。
- ・とっても楽しかった。
- ・他の青山学院大学でしているスポーツを知りたかった。
- ・ラクロスのスポーツ。
- ・ボクシングが印象に残りグローブの感触やボクシングの攻防の奥深さがわかった。
- ・バレーボールが楽しかったです。
- ・僕が印象に残った活動は「ラクロス」です。テレビでも見たことがあっていつかやってみたいと思っていたので実際にできて良かったです。スポーツ活動で大学生の方と交流することができて、スポーツをするに当たっても視野が広がったし、スポーツの新しい楽しさについてもしれたのでとてもいい経験になりました。
- ・一番印象に残ったのは少林寺拳法です。それに交流をしていろいろなスポーツに挑戦したり大学生との仲を深められたと思いました。

- ・サッカーで、大学生と試合ができた。
- ・自分は名前も聞いたことのないスポーツだったけど、とてもやりやすく、楽しかったラクロスです。
- ・バレーは学校で少しやっていたけれど更にうまくできたし今後もバレーをしてみたいなと思った。
- ・少林寺拳法。
- ・全部のスポーツをしてみたかった。
- ・大学生と交流して説明がわかりやすいと思った。

生徒アンケート5「生徒同士、先生たち、他校生徒との交流はいかがでしたか？」※回答抜粋

- ・難しくてもいっぱいすればできる。
- ・あまり話したことがない人とも話ができてよかった。
- ・いっしょにやっていた子といろんなこと挑戦できて嬉しかった。
- ・お互いにわからなかったら教え合ったり、たくさんのスポーツを通して交流を深めることができて楽しかった。
- ・スポーツを通して教え合うなどいろいろな交流ができました。
- ・ちがう組のことも一緒にできて楽しかったです。
- ・バレーをしたのが楽しかった。
- ・フットサルで、みんなで協力できて良かったです。
- ・ボールづくりを一緒に楽しむことができた。
- ・ボール作りを一緒に考えながらできて楽しかったです。
- ・みんなで普段やったことないスポーツを体験できてよかった。
- ・一緒に運動したりサッカーボールを作ったりして話しながらやったのが楽しかった。
- ・競技全般、友達と楽しむ事ができてよかった。
- ・協力できたこと。
- ・教えてくれて嬉しかったです。
- ・思い出が増えて嬉しかった。
- ・上手い人と喋れて体験したスポーツがうまくなった。
- ・人見知り抜けれた。
- ・普段話さない子とも話せた。
- ・友達と初めてのことに挑戦して、さらに仲良くなりました。
- ・話しながらやって楽しかった。
- ・アイスブレイクを通して普段交流のない人との交流ができたのが楽しかった。

- ・スポーツを通して絆を深められた。
- ・ボール作りが楽しかった。
- ・一緒に体育することはほばないのでとてもたのしかったです。
- ・質問したりすることができた。
- ・社交ダンスで息を合わせれた。
- ・生徒とか先生たちはいつも通りだけど楽しかった。
- ・生徒同士の関わりでもっと仲良くなった気がします。
- ・絆が深まった。
- ・違う学校同士でごちゃまぜにしたほうが良かった。
- ・同じ学校同士はたくさんはなせたけど他の学校は話せなかった。
- ・一緒にフットサルして楽しかった。
- ・野球頑張れて褒めてくれた。
- ・元々、仲が良い子が多くて気軽に話しかけられたりできたけど、もっと仲を深めれた気がする。
- ・松波の子とチームになってできて楽しかった。
- ・違う学年の人とも楽しくできた。
- ・最初は恥ずかしかったりしたけれど徐々に慣れてきて楽しく交流できました。
- ・先生たちといっしょにスポーツができて楽しかった。
- ・先生たちとボクシングで一緒に対戦したりして楽しかったです。
- ・他学年の人といつもより長い時間交流できた。
- ・普段、先輩とかと遊ぶ機会が少なかったから、楽しかった。
- ・友達の顔がキラキラしていて見ていて嬉しかった。
- ・あまり他校との交流機会は無かったので（少しはある）、良い経験になった。
- ・青学の人がとても面白い人が多かった。
- ・他の人と話しながらボールを作るのが楽しかった。
- ・応援するのもされるのも楽しかったです。
- ・色々と勉強になってとてもたんそいかったしまだ勉強頑張りたいなとおもいました。
- ・他校の子で直接話したのが初めての子といっしょに各スポーツのところを回れてよかったです。
- ・友達とゲーム感覚で練習したり、話しながらプレイすることが楽しかった。
- ・その人の得意なスポーツを理解することができた。
- ・生徒、先生関係なくしっかりと最後までいい雰囲気でのスポーツを終えられたことが嬉しかったです。
- ・特に大学生と交流できた。

- ・友達と一緒にいろんなスポーツをしたけど、友達とやることで仲をもっと深めることができて、またやりたいなと思いました。
- ・友達と話しながらできたし他の人と交流も増えた。
- ・様々な人とコミュニケーションを取ることができ楽しかった。
- ・他校と交流してスポーツをすると他校の人と交流できいいと思った。

生徒アンケート6「次回開催に向け、希望や改善点があれば教えてください」

- ・時間が増えたらいいと思った。スポーツ選手との話す時間ももっとあったらよかった。
- ・もっと話したい。
- ・時間がもっと欲しかった。
- ・もっと交流したかった！
- ・時間ちょうどよかった。
- ・全部のスポーツができなかったからもっと時間を長くしたほうがいいと思います。
- ・活動時間を長くして大学生や指導者ともっと話したかったです。
- ・アイスブレイクはあんまり必要ないかと思いました。
- ・全部回りたい。
- ・質問タイムみたいなやつは無駄な時間が多いと感じたから改善するといいと思った。
- ・もっと大学生とお話たかったし、全部回りたかったです。
- ・休憩時間をもう少し伸ばしてほしい。
- ・卓球、バドミントンがしたい。一つ一つのスポーツの時間や、全体の時間をもっと長くしてほしい。
- ・休憩時間を1回作ってほしい。
- ・次回は空手がしてみたいです。
- ・質疑応答の時間を増やしてほしいです。
- ・スポーツだけでなく、文化系の体験もしてみたい。
- ・午後とかに入れてほしい 丸一日にしてほしい。
- ・もっと交流時間を長くする工夫をしてほしい。(準備時間から一緒に)
- ・大学生と話す質問タイムや体験の時間を長くしてほしい。
- ・人数バランスが激しいと感じました。でも、自由にまわることで強制的なだるさがなくなったと思います。なので、スポーツの人気度をどこかに合わせるとより均等に自由にまわるんじゃないかと思います。